2022 年度　地域連携センタープロジェクト事業
成果報告書

造形芸術としての「ねぶた」

～富山県・北海道の行燈／京都瓜生山ねぶたとの比較から～

2023 年 3 月
青森公立大学　経営経済学部
地域みらい学科　佐々木研究室　編集

巻頭言

本報告書は地域連携センタープロジェクト事業「造形芸術としての「ねぶた」: 祭礼行事における制作物としての灯籠、行燈、山・鉾・屋台の比較から事業」の成果報告書である。2022 年度も新型コロナ・ウィルスの影響を受けたものの、ほぼ予定通りの調査を行うことができた。またなにより「青森ねぶた祭」が、コロナ以前の全ての運行団体の参加にはならなかったものの、3 年ぶりに開催され、ようやく青森の夏が戻ってきたと感じることができたのがよかった。祭礼の比較研究を行うにしても、やはりそれは「青森ねぶた祭」という基本があってこそのものである。その意味でも、祭礼としての「ねぶた祭」が実施されたことは原点回帰ともいえることであった。

さて、本年度のプロジェクト事業は、ねぶたの「造形」に注目するものであった。ねぶた祭中止の期間は、本当にねぶた師の活動が重要であることを再認識させられた。やはり「青森ねぶた祭」の主役は「ねぶた」本体であり、その制作物がなければ成り立たない。そしてその制作技術は、単なる祭礼の灯籠、山車という概念を超えて、ますます洗練されつつあることも認識させられた。しかしながらその技術がどのようなものであるのかは、一般にはなかなか伺い知ることはできないと言える。すでにねぶたの技法を使用した作品は、東京駅やデパートでも使用され、全国、さらに全世界的にも認められつつある。これは「ねぶた師」の制作技術の高さをもの語っており、さらにその技術はねぶた師個人の感性も含まれた作風として表現されている。すでにねぶた師は「作家性」を獲得しているといえるだろう。その意味でも、やはり「技術」に注目することは必須の事だと思われた。こうした認識のもの、他の行燈祭や祭礼行事に使用される「燈籠、行燈、山・鉾・屋台」の制作技術と比較することで、「ねぶた」の技術がより明らかにされると思い事業をすすめた。

今回は特に、竹浪比呂央ねぶた研究所の協力を仰ぎ、技術面についてこれまでより深く考察することができた。富山県福野や北海道沼田町で、互いの制作方法について対話してもらったことは、貴重な経験となった。また道すがら、それぞれの地方の制作物をじっと見つめ、技法を観察している竹浪比呂央先生の姿は忘れられないものとなった。今回の調査に研究所が参加してくださったことは、佐々木のみならず調査に参加した学生にとってもよい刺激となったといえる。また例年の事ではあるが、富山、北海道、京都など現地で多くの方に出会い、そして貴重なお話を伺うことができた。特に調査に協力いただいた富山の河合秀和さん、布袋泰博さん、北海道沼田の坂本久和さん、北海道八雲の佐藤正之さん、佐藤真理子さん、そして京都芸術大学の箭内新一先生にお礼申し上げたい。さらに今回の富山調査では祭礼研究の第一人者である、江戸川大学の阿南透先生にも大変お世話になった。阿南先生が同行してくださったおかげで、富山の方々と交流をもてたことが非常に大きかった。皆様にこの場を借りてお礼申し上げたい。ありがとうございました。

最後に本年度も佐々木ゼミの 2 年生のゼミ生が積極的に調査で活躍してくれた。12 月の成果報告、報告書の作成まで頑張っておこなった。彼らのこの一年の成長を非常に実感できるものであった。次年度以降も、こうした調査をすすめ、教育研究を推進していきたいと考えている。

2023 年 2 月

青森公立大学　教授　佐々木てる

目次

第一部　2022 年度調査報告

0　研究目的と調査概要：造形芸術としての「ねぶた」を考える　佐々木てる 1

1　八雲山車行列　西川花菜　尾藤実裕　8

2　福野夜高祭り　飯田栞音　成田葵葉　11

3　沼田町夜高あんどんまつり　熊地勇樹　三澤佳奈　松村南　16

4　京都芸術大学：瓜生山ねぶた　西川花菜　尾藤実裕　19

第二部　聞き取り資料

北海道：八雲山車行列　22

富山：福野夜高祭り　27

北海道：沼田町夜高あんどん祭　44

第三部　2022 年ねぶた運行団体紹介
公開講座・研究報告資料

・2022 年ねぶた運行団体紹介　57

・公開講座・研究報告資料：竹浪比呂央／津川創　79

第一部　2022 年度調査報告

0　研究目的と調査概要

: 造形芸術としての「ねぶた」を考える

青森公立大学　地域みらい学科　教授　佐々木てる

1　本事業の目的および明らかになったこと

本事業の目的を説明するにあたりここ数年の取り組みを簡単に述べておきたい。まず青森ねぶた祭の特徴をより明確にするために、比較祭礼研究をスタートしたのが 2019 年であった。この年は京都祇園祭、野辺地祇園祭、田名部祭り等と青森ねぶた祭を比較し、その特徴を明らかにしてきた。結論から言えば、ねぶた祭の規模やそのエネルギー等が他の祭の追随を許さないものであったといえる。しかしながら単純に祭礼としての比較ができないことも認識した。というのも、京都祇園祭を中心とした、いわゆる神事としての祭礼と、ねぶた祭のような、民俗行事としての祭礼とはその主旨や形態が違うからである。そこでそういった祭礼の違いをより明確にするために、2021 年に青森県および近隣県の祭礼調べることとした。その結果、青森と同様のいわゆる「灯籠文化圏」系の祭礼と、祇園祭を発祥とする、いわゆる「山鉾屋台行事」系の祭礼があり、それぞれ別々の伝統がはぐくまれていることがわかった。特に「灯籠文化」としての祭礼の特徴は、その時その時に災いを祓うという趣旨から、手間暇かけたものを惜しげもなく壊してしまうことが多い。それにもかかわらず、造形物は歴史とともに技巧も含め進化していることがわかった。逆に「山鉾屋台」行事は、祭礼で使用するものは長期間、繰り返し使用することが多く、そのため一つひとつの造形物には、伝統的な技巧を凝らしたものが多いといえる。

このように、もともと祭礼を比較することで、その祭礼を創り出す人の関係性や、組織性、地域性を見てきたが、同時に技術的なものにも着目するに至った。そのため本年度の事業は「造形芸術」という視点を中心に据えて、祭礼を比較してみることを思い立った。以下は本研究目的として提出した文章である。

> 「ねぶた」の造形に焦点をあてて、その技術や歴史的な背景、伝承などを明らかにすることとする。ただし、一般的な制作技法の変遷や歴史などはすでに、『青森ねぶた誌』などで明らかにされている。そのため、本事業では技術的な比較中心に行い、ねぶた制作の技法をより明確にしていく。特に、影響を互いに与えあっていると思われる「夜高行燈」「山・鉾・山車」「(ほかの地域の）灯籠」の造形に焦点をあて、比較しつつ「ねぶた」制作技術の独自性を明らかにしていくことを目的としている。
>
> また今回はねぶた師、竹浪比呂央氏と共同研究を行うことにより、他の祭の制作物の技術的な特質性と「ねぶた」本体の技術水準をより専門的に明らかにする

ことも事業の目的となっている。

今回の事業の最も大きな点は、実際のねぶた師、竹浪比呂央先生に関わっていただき、技術的な面から祭礼を見ることができたことであった。その結果、いままで気づかなかった点を多く知ることが出来た。例えば、使用している和紙や染料の種類、色の塗り方、ロウがきの技法、根本的な骨組みの違いなど多くのことに気づかされた。また京都芸術大学においては、まさしく芸術の分野で、ねぶたの技法が取り入れられていることを目の当たりにして、非常に驚いた。

こうした造形に注目することで、**祭礼は単なる民衆が盛り上がるためだけのものではなく、伝統文化を醸成していくものであり、芸術的な視点においても新しいものを創り出していく「メディア」であることを再認識した。**前年度の報告書において、祭礼で使用する山車や灯籠といったもの自体が、メッセージ性をもつ「メディア」であることを指摘した。**今回の造形に関する調査は、そのメディア性の中身＝すなわち「造形に託された、技術者のメッセージ」を具体的な水準で明らかにすることにつながった。**技術者／造形作家は自身がこの世から消えても、その技術をなんらかの形で残そうとモノに託す。そしてそのモノに表現された技術は様々な人々に伝承され、そして継承されていく。その繰り返しが伝統を創り出し、わらわれに多くの財産として残されていく。こうした技術者／造形作家が託してきたメッセージを強く感じる調査であった。また次年度以降はこうしたメッセージをいかに有効に残し、次世代につなげていくかを考える研究事業を行っていきたいと思っている。

2　調査概要

すこし先走ってしまったが、今回の調査の具体的な訪問地、調査者、被調査者などを紹介しておく。調査内容に関してはつぎの章から学生報告として書かれているのでそちらを読んで頂きたい。なお今回の事業の訪問地と日程は下記の通りである（敬称略）。

2022 年 4 月 30 日～5 月 3 日　富山県福野

参加者　青森公立大学　佐々木てる　　成田葵葉　　飯田栞音

竹浪比呂央ねぶた研究所　　竹浪比呂央　　（＋江戸川大学　阿南透）

4 月 30 日　高岡御車山会館訪問　祭礼雨天中止

5 月 1 日　　城端曳山会館訪問　　福野夜高祭訪問

5 月 2 日　　福野夜高祭　聞き取り調査　　布袋泰博（制作関係）

夜高祭　引き合い見学

5 月 3 日　　神事調査

聞き取り調査・アテンド　　福野夜高保存会　河合秀和

2022 年 7 月 2 日～3 日　北海道八雲

参加者　青森公立大学　佐々木てる　尾藤実裕　西川花菜

7 月 2 日　八雲山車行列観覧　関係者へ聞き取り
7 月 3 日　関係者へ聞き取り　実行委員長　佐藤正之
佐藤真理子

2022 年 8 月 19 日～22 日　北海道沼田町　北海道岩見沢
参加者　青森公立大学　佐々木てる　三澤佳奈　　松村南　　熊地勇樹
飯田栞音　成田葵葉
竹浪比呂央ねぶた研究所　竹浪比呂央　津川創

8 月 19 日　沼田夜高あんどん祭り　観覧　資料収集
8 月 20 日　関係者（たくみの会）に聞き取り　坂本久和
あんどん祭り　ぶつけ合い　観覧
8 月 21 日　北海道教育大学岩見沢校　岩見沢ねぶた実行委員会に聞き取り
8 月 22 日　制作現場訪問　聞き取り調査

2022 年 11 月 13 日　京都芸術大学　訪問
瓜生山ねぶたプロジェクトに関して聞き取り
京都芸術大学　教授　箭内新一

訪問先では多くの方々に協力を頂き、この場を借りて再度お礼申し上げたい。
さて、今回は富山県の夜高行燈祭の行燈、北海道沼田町のあんどん祭りの行燈について、その制作方法などを詳しく聞くことができた。ねぶたと同様にろうがきをする点など、制作についてねぶたと共通する点は多い。ただし富山、北海道とも当日「壊しあう」ことを前提としている。そのため毎年、ほぼ同じものを制作する点などはねぶたと大きく違う。

また新規性を求めていくことと、再現性を求めていくことで技術の進化の度合いも変化していく点は大きい。今回の調査では、富山県の高岡御車山、城端曳山など、いわゆる山車も見学することができた。そこで使用される山車は、何度も使用することが前提であり、伝統的な技巧が随所にちりばめられている。例えば、高岡御車山は「国重有形民俗文化財」「ユネスコ無形文化遺産」にも登録されており、その山車には「金工、漆工、染織等の優れた工芸技術の装飾」[1]がほどこされている。城端で行われる山車行事の山車も、その車輪には見事な技巧が施されている。また福野で日中行われる山車運行の山車も、技工が凝らされており、修理する場合多額な費用がかかると聞いた。こうした伝統技能が祭礼には存在することは非常に重要なことだと思われる。技能は求められなければ、その存在価値を失うし、技能者も姿を消す。祭礼を通じて、過去から未来へのメッセージとして技術は伝承されているよい例といえる。

またねぶたの技巧はさらに進化を遂げ、新規性という意味で発展し続けていることもわ

かった。ねぶたは過去の再現性を前提にしているわけでない。もちろんテーマ性や精神性については伝統という中に息づいている。だが技術、技工は常に新しいものが取り入れられてきた。例えば、近年ではＬＥＤライトをいかに上手く使うかが、作品の出来に大きくかかわっている。特に夜、ライトをつけて運行することを前提にしているため、その光と発色の関係は綿密に計算されているといえるだろう。こういったねぶたの技工は新しい芸術としての境地を徐々に切り開いている。

今回訪問した京都芸術大学や、北海道教育大学岩見沢校での「ねぶた」に関する取り組みは、専門の芸術文化を学ぶ大学で注目されていることで、芸術性の高さの証明となっているだろう。例えば京都芸術大学での「瓜生山ねぶた」では、ねぶた制作の技法をベースに、紙と針金のアートとして作品が洗練されていることがわかった。そこでは色を塗らないという方針から、和紙を重ねることで着色しているように見えるなど、ねぶた制作の技法が応用されていた。このように、**芸術大学でも「ねぶた」を一つの固有のアートとして見始めていることを強く認識した調査であった。**

3　メッセージ性を持つ技法

それぞれの祭礼の山車について、簡単に述べておこう。今回の調査では「福野夜高祭り」「沼田夜高あんどん祭」「八雲山車行列」「岩見沢ねぶた」を実際に見ることができた。なお富山の「城端曳山祭」は資料館の見学のみ。「高岡御車山」の山車運行は雨天のため中止であったが、資料館および路上の展示を観ることができた。特徴的であった点を指摘しておく。

3.1　山車の保存という視点

すでに述べてきたが、いわゆる祇園祭り系の「山・鉾・屋台」は何度も使用され、古くなれば修理される。できるだけ保存されることを念頭に、その技工も歴史と伝統を継承することが前提となっている。

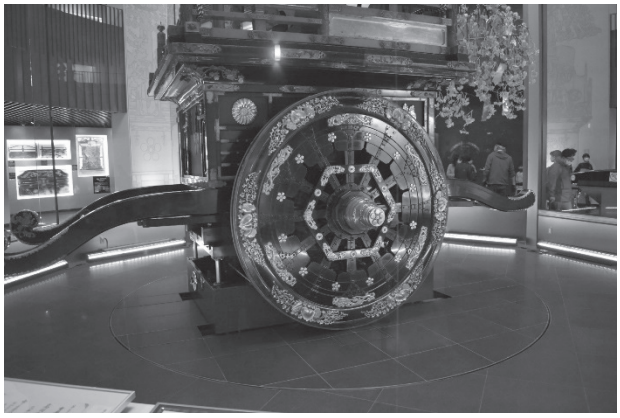


写真 1：高岡御車山の車輪

写真 2：城端曳山祭の山車の車輪

前年度の比較祭礼研究で取り上げた、秋田「花輪祭の屋台行事」の屋台などは今回のものに近い。違いとしては、富山での最大の特徴はその車輪の大きさと技工にあったといえる（写真 1，2)。現在の高岡の御車山は平成に入り制作した「平成の御車山」であり、国の重要有形民俗文化財「高岡御車山」をモチーフにしたものである。しかしながらその技術は、「伝統産業技術の伝承」を目的としており、「焼嵌め（やきはめ)」「焼型鋳造技法（やきがたちゅうぞうぎほう)」[2]などさまざまな伝統技法が使用されている。各地で使用される「神輿」などでも、伝統的な木彫りが使用されるなど、壊すことを前提とした祭礼においては取り入れらない技法といえるだろう。

3.2　制作技法[3]

ねぶた祭など、行燈で使用される技法は保存を目的としたものとは違った技術を魅せてくれる。まず**骨組み**は、竹や針金を使用する。福野でも沼田でも竹を使用することが多い。ねぶたも現在は針金が使用されているが、それ以前は竹で作られていた。針金を導入することによって、その造形美が飛躍的に進化したとの指摘もある。福野や沼田のようにその場で壊す場合は、やはり安全面や、「きれいに壊れるか」という視点からも竹の方がよいのかもしれない。

骨組みの上に表面にはる**和紙**についてもそれぞれの伝統がある。福野においては、和紙の産地である「五箇山」がある。ここから「手漉きの和紙」を仕入れて使用している灯籠もあるという。これに対して、ねぶたでは「機械漉きの奉書紙」を使用している。違いとしては「手漉きの和紙」は雨に濡れるとドロドロになってしまうこと、また光をともした時に発光色に違いがでることが指摘されている。ねぶた祭りの場合はおおよそ 6〜7 日間外で運行しなくてはならないのに比べ、福野は 2 日で終わるという期間の条件の違いもあるといえる。

次に和紙の上に塗る**染料**についてであるが、使用する染料についても「塩基性の染料」「酸性の染料」と違いがある。「酸性の染料」を使用すると堅牢度が高いためもあり、筆がすぐ傷んでしまう。そのためねぶたでは「塩基性」を使用するとの指摘があった。また色に関しては、沼田でも指摘があったが、夜に映える色として赤、特に極彩色が用いあれるという。この傾向はねぶたでも同じだといえるだろう。違いとしては福野の行燈は、ねぶたが対抗色を中心に使うのに対し、福野の行燈では同系色を重ねていくことであった。この違いは面白く、福野の行燈を見たときに赤とピンクが圧倒的に多かったことである。またねぶたにおいては近年パステルカラー（中間色）を積極的に取り入れているねぶた師もいる。ねぶたにおける色彩の使用の変化も注目していくとさらに考察が深まるといえる。

このほか**ロウがき**で使用するロウについても、福野では白ロウを溶かして使用するのに対し、ねぶたではパラフィンを使用するという違いがあった。普通のロウの場合は淡い色合いになり、パラフィンは「透き通った感じになる」という。その灯籠山車の特徴の違いによっても使用するロウが違う。

もちろんこれらはねぶた師によって使用する染料やロウなども違ってくるだろうし、ま

た福野の町会によっても差異があるだろう。これらを混合しながら、制作箇所で技法を変えている場合もあるだろう。しかしながら様々な技法がその都度選ばれながら作品が完成していくことを実感させられる。

このほか、瓜生山ねぶたや岩見沢ねぶたは、基本的にはねぶたの技法を用いている。ただし岩見沢や八雲山車行列は「祭」としての側面が強く、山車の技法というより、それが登場することが重要だという点で別の意味を持つだろう。今後さらに注目していきたい。瓜生山ねぶたは、「紙と灯りのアート」としての地位を確立しつつある。青森においても、2021 年に**白ねぶた**のプロジェクト（「ねぶたアート創生プロジェクト」）がおこなわれ注目をあつめた。ねぶたの技法がさらに進化して、造形物として魅せるもとのなっていく兆しがある。

写真 3：「跳ねらん」

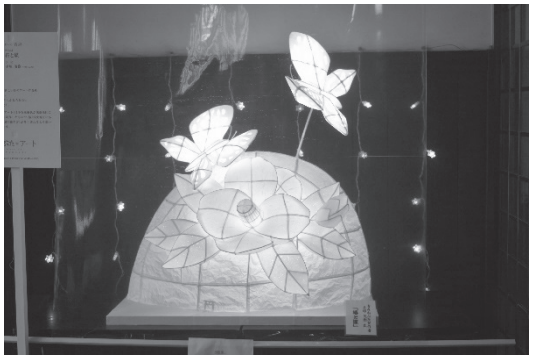


写真 4：「ツバキと蝶」

まとめ

前年度の研究ノートにおいて「ねぶたがメッセージ性を持つ、メディアである」ということを主張した。繰り返しになるが、メディアとは「媒介」であると同時に、それ自体がメッセージ性を持つものである。ねぶたという造形物そのものを見ていくことは、地域内の「市民」と「市民」や「地域」と「地域外部」をつなぐメディアとしての役割を見ていくことにほかならない。さらに今回の調査においては、技術をみていくことによって「過去」と「現在」をつなぐメディアにもなっていることが考察された。これが文化財としての伝統の継承の中身だといえる。

このことはもちろん「ねぶた」だけに限ったことではなく、他の祭礼の行燈、そして「山・鉾・屋台」にも言えることである。いずれにせよ、祭礼とは単なる「祭り、祀る行事」にとどまらず、人と人、そして技術や伝統をつないでいく機能物として社会性を持っているといえる。そしてそれをいかに後世に伝えるシステムをつくっていくのか。それは次の課題としておくことにする。

註

1　「高岡御車山会館」ホーム・ページ。2023 年 2 月 19 日参照（https://mikurumayama-kaikan.jp/history/）

2　「焼嵌め（やきはめ）」: 軸と穴のはめあい方法のひとつで、常温では軸より小さい穴を、加熱膨張させることではめあわせ、堅く結合させる方法。引用：福田交易の HP、工業用語より（https://www.fukudaco.co.jp/support/glossary/shrink-fit.html）。
「焼型鋳造技法（やきがたちゅうぞうぎほう）」: 焼型鋳造法は、粘土で造形した鋳型を高温で焼成し、次に約 400 度程度で空冷した後、溶かした金属を鋳型に流し込み成形する加工法。引用 : 銅像製作の手引き » 銅像とは？｜銅像に詳しくなる基礎知識 » 銅像の鋳造法。サイト運営者全研本社株式会社（Zenken Corporation）
（https://www.bronzestatue-prod.com/column/casting_method.html）

3　3.2 の技法に関しては報告書に掲載してある第 2 部の「2　富山：福野夜高祭り」を参照してほしい。

1　八雲山車行列

西川花菜　尾藤実裕

1.1　調査概要

調査者：佐々木てる　西川花菜　尾藤実裕

話し手：佐藤正之　佐藤真理子

調査日：2022 年 7 月 2～3 日

調査地：北海道八雲町

1.2　北海道 八雲山車行列とは

北海道 3 大あんどん祭りの 1 つ、八雲山車行列が、7 月の第 1 金曜日、土曜日の 2 日間にかけて北海道の八雲町で開催される。コロナの影響で今年は 2 日土曜日のみの開催となった。公式ホームページによると、八雲山車行列のはじまりは、1982 年の「若人の集い」前夜祭となっている。その後町の自慢にしようと若者の夢は広がり、町民の心をつなぐ地域の新たな文化創造と位置付けたという。弘前扇ねぷたの特別参加、おはやしの創作、札幌市や名古屋市、小牧市などへの山車の参加をとおして規模も大きくなり、30 数台のあんどん山車には踊りやお囃子がつき、幼児からお年寄りまで各年代層の自己表現の場となっている [1]。

写真 1・2　内山龍星先生制作のねぶた

1.3　八雲山車行列の特徴

1.3.1　あんどんについて

立体型のねぶた、扇形のねぶたがあり、何年かに一度に張り替えている。制作時間はゴールデンウィークから 2 ヶ月ほどとなっている。

1.3.2　参加条件

行燈さえあればだれでも参加可能な祭である。踊り、囃子も自由で、八雲の伝統的な囃子は 5 つほどある。団体については小さい団体でも 20 人ほどいて、青年たちだけの団体、大人だけの団体、幼稚園の団体など様々である。

1.3.3　2021 年の取り組み：コロナの影響

2021 年の八雲山車行列は中止になってしまったが、「このまま山車行列が開催されないのは寂しい」「山車の時期には山車のことを思い出してもらいたい」という思いから山車行列の運行コースにミニ行燈を設置し（写真 3）、山車行列が開催されるはずだった日時に点灯することで、八雲の夏の夜を明るく灯すという取り組みも行っていた。2022 年の開催については、ビアガーデンがなしや、外部からの応援は断り、1 日のみの開催でコースも短縮した。それによって規模は 4 分の 1 で開催した。

写真 3　コースにおいておいたミニ行燈

1.3.4　運営

この祭りは神事ではなく、若い人たちが作ったお祭りなので、実行委員会が主体である。なお運営には各団体から 2 名ずつ関わっている。もともと生涯学習、青年教育、社会教育から発生した祭りなので、八雲町の教育委員会教育課が担当している。

運営資金についてだが、全体で 500 万円規模である。その内訳は、街の補助金、祭り行事協賛会、住民カンパから成り立っている。制作費は各団体に 10 万円ほど支給されており、行燈を作りかえる団体にはさらに 10 万円が支給される。祭り自体には、2 日間で約 3 万人が訪れ、2000 人以上が祭りに参加している。それによる経済効果は、2 日間で 1 億円となっている。

1.4　ねぶたとの関係、比較

まず、青森ねぶたの特徴として観光向けのお祭りの傾向にある。また、毎年ねぶた師によ

るねぶたの制作が行われている。さらに全団体が共通したお囃子や、ハネトの衣装が必須になっている。

一方で八雲山車行列は、地域の人達が楽しむお祭りという印象であった。伝統的なお囃子もありが、基本的には好きな音楽や、踊りをしている。創世記のころにねぶた師に教えてもらった作り方で今も制作しているが、毎年ではなく、中古のねぶたを買って使うこともある。

まとめ

沼田夜高あんどんまつりは昭和 52 年に富山県小矢部市から北海道に伝わった、「ぶつけあい」という特殊な催しがある祭りである。山車の作り方はねぶた祭りとよく似ているが、山車を作る際の制約や見た目、運行などで目立った相違点が見つかった。沼田夜高あんどんまつりは、「ぶつけあい」という面で迫力を演出しているが、運行自体での盛り上がりはあまり見られなかった。ねぶた祭りは「ぶつけあい」のような奇抜な催しはないが、山車が来れば歓声が上がるなど、山車単体での迫力で観客を圧倒している。違いの理由としては、誰をターゲットとしているかや何を重んじているかが影響していると考えられる。祭りに優劣は無いとはいえ、祭礼として洗練されていると感じるのは、積み重ねた歴史の側面から見て正直なところ青森ねぶた祭りではないか、というのが我々の意見である。沼田夜高まつりもこれからさらに歴史を積み重ねて洗練されていくことを期待する。

註

1　公式ホームページより　（http://www.yakumo-dashi.com/）

参考文献

北海道三大あんどん祭り 八雲山車行列 オフィシャルウェブサイト (yakumo-dashi.com)
八雲山車行列実行委員会 2012『八雲山車行列 30 年』
八雲山車行列 2022　引用動画（https://youtu.be/n3I07YDQsQo）

2　福野夜高祭り

飯田栞音　成田葵葉

2.1　調査概要

調査日：2022 年 5 月 2 日、3 日

場所：富山県福野市

調査者：佐々木てる　　成田葵葉　　飯田栞音

竹浪比呂央（竹浪比呂央ねぶた研究所）

2.2　福野夜高祭りについて

福野夜高祭は富山県南砺市福野地域に伝わる福野神明社の春季祭礼である。毎年 5 月 1 日から 5 月 3 日にかけて行われる。4 月 30 日の前夜祭から始まり、5 月 1 日、2 日の宵祭りでは行燈の練り回し、引き合い、シャンシャンの儀が行われ、3 日の本祭では四町の曳山巡行が行われる。

5 月 1 日、2 日の宵祭りでは、「ヨイヤサー」の掛け声とともに、高さ 7m もの「大行燈（おおあんどん）」が通りを練り回り、祭り気分を盛り上げる。夜高太鼓が打ち鳴らされ大行燈に赤々と灯がともり、夜高節や夜高踊りが披露されるなど祭りムードがますます高まる。

最大の見どころは、2 日の 23 時頃から始まる呼び物の引き合い（ケンカ）である。若衆によって互いの行燈の壊し合いが行われる。その激しい引き合いは、見る者を釘付けにする迫力がある。

写真 2.1　夜高行燈の夜の運行

表 1　日程

4 月 30 日（土）	19：30～21：30	前夜祭
5 月 1 日（日）	18：30 頃～23：00 頃	練り回し
5 月 2 日（月）	23：00 頃～深夜	引き合い（ケンカ）
	25：00 頃（未明）	シャンシャンの儀
5 月 3 日（火）	10：00～	四町曳山巡行

2.3　起源と歴史

2.3.1　福野夜高祭の起源

江戸時代に南砺市 福野地域（旧福野町）の町立ての際、伊勢神宮からの分霊を迎えた時に行燈（あんどん）を持って出迎えたのが祭りの起源と伝えられている。おおまかな歴史は下記のようになっている

表 2　福野夜高祭の歴史

2000 年　高さ 12m を超える行燈の制作
2004 年　福野夜高祭→県の無形民俗文化財
　　曳山祭の曳山→□市の有形文化財
2007 年　文久の大行燈の練り回し
2011 年　フランス・リヨン市の「光の祭典」へ海外遠征
2013 年　相馬野馬追前夜祭に参加（2017 年も）
2017 年　日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産

2.3.2　リヨン遠征

2011 年にフランス・リオン市のイベント「光の祭典」に、福野夜高行燈が招待された。福野夜高行燈が招待された理由としては、3 月の東日本大震災の結果、日本への注目が高まり、光の祭典の実行委員会に福野夜高行燈の素晴らしさが伝わっていたからである。このリヨン遠征をきっかけに観客動員数が増加し、知名度が高くなったため、福野夜高行燈が福野の人にとって無くてはならないお祭りとなった。

2.4　夜高行燈の特徴

2.4.1　造形的な特徴

造形の特徴は以下の通りである。まず色だが、基本は赤とピンクを基調としている。色彩のルールはなく、カラフルなのが特徴である（写真 2，3）

高さは約 6m70～80cm で、造形としては、骨組みは竹で制作する。その他、番線、木材、塩化ビニールパイプ等を使用している。光は電球を使用。模様としては、和紙に手書き（型紙、フリーハンド）で行う。様々なパターンを組み合わせて作成するのも特徴と言えるだろう。またねぶた同様、蝋引きも行う、絵柄の輪郭線としての役割を持ち、紙が透明になり、明るく美しく見える効果がある。染料は、いくつかの色を混ぜ合わせ調合している。

2.4.2　運行の特徴

運行は、福野神明社の氏子である上町、七津屋、新町、御蔵町、横町、浦町、辰巳町の七つの町内の人によって行われる。運行場所は「銀行四つ角」を中心に行われる。参加者

は 20 代後半の男性が中心である。また神事であるため、男性のみの参加や家紋、神社参拝などの伝統文化を重んじている。

写真 2.2　上町の行燈

写真 2.3　七津屋の行燈

2.5　曳山の特徴

曳山巡行は 5 月 3 日に行われる。福野には、「上町・七津屋」、「横町」、「浦町・辰巳町」、「新町」の四基の曳山がある。このうち、「上町・七津屋」が船形山、あとの三基は花傘山。山人形の意匠は、「上町・七津屋」が「神功皇后の西征航海」、「横町」が「猩々（しょうじょう）の汲み酒」、「浦町・辰巳町」が「素戔嗚尊（すさのおのみこと）の大蛇（おろち）退治」、「新町」が「橋弁慶牛若丸」である。

写真 2.4　曳山が巡行して神社に集まった時の様子

2.6　伝統的儀式について

・引き合い（ケンカ）

引き合いとは、すれ違いざまに互いの行燈を壊しあうもので、この祭りの最大の魅力となっている。2 日の深夜に行われ、2 ヶ月間かけて作った行燈を壊し合う。掛け声「ヨイヤサー」と太鼓の音で行燈の突き合わせが行われる。引き合いは住民が健やかで元気であることの象徴であり、豊作祈願になると言われている。より派手な引き合いが行われた年は良い年になるとも言われている。

昔　綱の引っ張り合い、行燈に乗る人は数人
今　行燈を壊すもの、10 人以上の大勢の若者が行燈に乗って壊す
　　子供行燈も多数参加（昭和以降）
　　女子の参加・活躍

・シャンシャンの儀

夜高祭を無事終えた報告と、当番裁許の引き継ぎを行う儀式である。行事終了確認後、儀式的な飲酒を行い、手拍子で締めくくる。

写真 2.5、2.6　シャンシャンの儀の様子

2.7　制作について

製作は 2 月の後半から 3 月にかけて行われる。作業人数はおおよそ 14～15 人で制作する。制作に参加するのは、高校卒業した 18 歳からと決まっている。また基本的には前年度使用したものを、修理して使うので、まず破損した部分を直すところからスタートする。制作者にも役割分担があり、竹細工、電気、ろう引きは専門の人が作業する。また紙張りと色塗りはみんなで作業という。ばらばらで分けて作ったものを最後にレッカーで上から挿しこんでいき完成に至る。

2.8　ねぶたとの比較

制作面では、和紙、染料、ろうを使用している点、提灯がねぶた絵である点がねぶたと共通している。また、人手不足による後継者不足が起きているため、子供向けの教育活動に力を入れている点も共通していた。その他にも、青森ではねぶた好きな人に対して「ねぶたばか」という呼び名があるように、福野では行燈キチガイ、略して「あんきち」と呼ばれる行燈好きを表す呼び名がある。

制作面では、赤とピンクを基調とした配色で毎年同じ模様が使われている。
ねぶたにはない引き合い（ケンカ）がある祭りで、先ほども紹介したように、神事の祭りである。時間が決められておらず、時間をかけて行われる。

2.9　まとめ

巡行を行う町内の人たちが楽しんでいるというのが印象的である。豪華な行燈を自分たちの手で、わずか 30 分で破壊する様子から、寂しさと儚さを感じたが、伝統と風情を感じる。コロナウイルスの影響により祭が 3 年ぶりの開催ということで、地域全体が盛り上がっていた。特に、引き合いの場面はこの 3 年間の想いをぶつけるかのような迫力が感じられた。福野の人々の祭りへの情熱に胸が熱くなる。

参考文献/URL

阿南透・藤本武　2018　『富山の祭り　町・人・季節　輝く』桂書房
福野の曳山＞いこまいけ南砺（http://nanto.zening.info/yotaka/hukuno□hikiyama.htm）

3　沼田町夜高あんどんまつり

熊地勇樹　三澤佳奈　松村南

3.1　調査概要

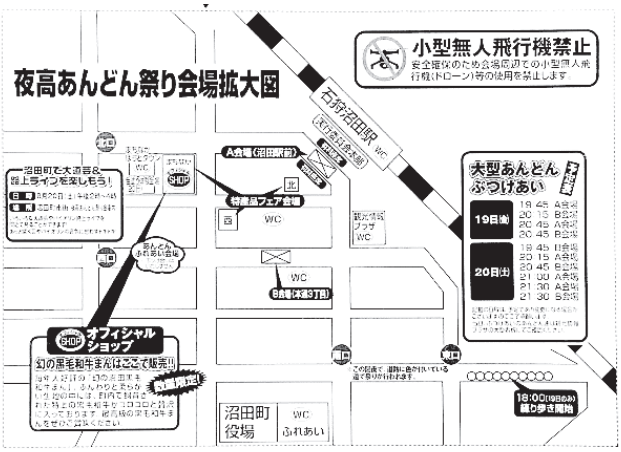
調査者：佐々木てる　竹浪比呂央　津川創　熊地勇樹　三澤佳奈　松村南
　　飯田栞音　成田葵葉

調査日：2022 年 8 月 19 日（金）～22 日(月)

調査地：北海道　沼田町　観光情報プラザ
　　北海道　岩見沢市　北海道教育大学岩見沢校

3.2　沼田夜高あんどんまつり

沼田夜高あんどん祭りは毎年北海道空知総合振興局沼田町にて開催されている。例年は 8 月の第 4 金曜日と土曜日に行われているが、今年から 8 月中旬に変更となった。運行ルートは以下のマップの通りとなっている。



←写真 3-1　実際の会場図

ルート上にＡ会場とＢ会場が設置されており、その 2 か所で「ぶつけ合い」が行われる。「ぶつけ合い」とは、その 2 か所で一方の山車の先端で突いて、もう一方の山車の前方についている吊りあんどんを壊す行為を指している。祭りで一番の盛り上がりを見せていた。

3.3　沼田夜高あんどんの歴史

沼田夜高あんどんまつりは、沼田町開拓の祖である沼田喜三郎の出身地である富山県小矢部市より昭和 52 年に伝承したものである。

写真 3.1　沼田喜三郎

せっかく作ったあんどんを壊すという今までにない形態の楽しみ方を北海道にも輸入しようということで、沼田町で元々行われていた田植え前の祭りに組み込むこととなった。富山県から 10 人の指導者を呼び、富山のあんどん祭りの技術を教えてもらい、同年 9 月に沼田町にて初めてのあんどん祭りが行われた。この時は安全を考えてぶつけ合いは行われなかった。その 2 年後には夜間運行の開始、1962 年にはぶつけ合いも開始された。小矢部市と沼田町は現在も交流が続いており、今年で友好姉妹都市連携 20 周年を迎えている。

3.4　山車・囃子・制作

祭りに使用される山車は高さが特徴的であり、高さ 7m、長さ 12m、幅 3mという迫力満点のものとなっている。釣物前というところに吊りあんどんを設置して、その後ろに山車を設置している。山車の特徴として挙げられるのは「色の制約」と「竹の使用」である。使用可能の色は赤、トキ、黄色、緑、青の 5 色のみとなっている。5 色を混ぜてはいけない決まりがあり、限られた色で各団体の個性を出していた。骨組みには竹が使用されている。針金は曲げにくいというのが竹を使用する一番の理由である。

囃子はベースとなる曲が存在する。それを団体ごとにアレンジをして太鼓とかねを用いて「よいやさー」の掛け声と共に演奏して祭りを盛り上げている。歌詞も存在しており、山車の上に乗った団体のリーダーが大声で演奏に合わせて歌っていた。

山車の制作は、6 月初めから開始し、毎週月曜日から土曜日、20 時から 22 時の 2 時間行っている。山車の作り替えは、本体は 5 年に 1 度、毎年壊される吊りあんどんは毎年各団体で最低 5 個制作している。

3.5　実際に運行された山車

2022 年は「役場」、「JA きたいぶき」、「自衛隊」、「商工会」、「沼田小学校」の全 5 団体が参加した。大型の山車は 4 台、幼稚園小学校中学校高校の中小型の山車が町を練り歩いた。テーマは花や龍、伝統的な物がメインとなっており、参加した 5 団体もそれに沿ったものとなっていた。

様々なものが制限されている中で、ロウと染料の使用面積を工夫したり、どのように模様を描くかをそれぞれで考え、個性的で豪華な山車で町を練り歩いていた。

写真 3.2 商工会の山車

写真 3.3　沼田小学校の山車

3.6　祭りの関係者

山車の運行は男性のみ参加可能となっている。女性は制作や、ぶつけあいの前座となる演奏や踊りのみ参加を許可されている。

この参加制限はこの祭りが神事であることが関係している。沼田町の神社に由縁があるわけではなく、富山県から輸入してきた際に神事という形だけを取り入れているため今の参加形態となっている。しかし、男女平等が叫ばれている現在、この参加制限も社会に適応

したものにするか関係者内でも議論されているそうだ。

また、祭りの保存会によって選ばれる「たくみの会」というものがある。これは、絵師や山車の造形制作に秀でている人が毎年保存会によって推薦され、技術の継承を目的として構成されている。年齢は若くて 50 歳、最高齢で 80 歳超えであり、中高年の方が多いそうだ。

3.7　ねぶた祭りとの比較

青森ねぶた祭りの山車の特徴として、「横長」「色の制約がない」「テーマは自由」などが挙げられる。それらに対し沼田町夜高あんどんまつりの山車の特徴として「縦長」「色の制約がある」「テーマの固定」などが挙げられる。そのほかにも囃子の演奏に笛が用いられているかどうかや山車に人がのるかどうか、製作期間の長さも明確な違いとして挙げられるだろう。

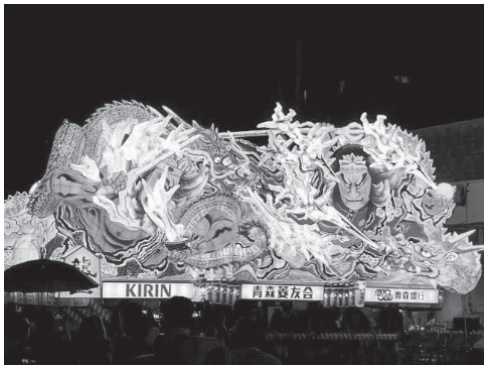


写真 3-5 ねぶたの山車

写真 3-6 自衛隊の山車

3.8　まとめ

沼田夜高あんどんまつりは昭和 52 年に富山県小矢部市から北海道に伝わった、「ぶつけあい」という特殊な催しがある祭りである。山車の作り方はねぶた祭りとよく似ているが、山車を作る際の制約や見た目、運行などで目立った相違点が見つかった。沼田夜高あんどんまつりは、「ぶつけあい」という面で迫力を演出しているが、運行自体での盛り上がりはあまり見られなかった。ねぶた祭りは「ぶつけあい」のような奇抜な催しはないが、山車が来れば歓声が上がるなど、山車単体での迫力で観客を圧倒している。違いの理由としては、誰をターゲットとしているか、何を重んじているかが影響していると考えられる。祭りに優劣は無いとはいえ、祭礼として洗練されていると感じるのは、積み重ねた歴史の側面から見て正直なところ青森ねぶた祭りではないか、というのが我々の意見である。沼田夜高まつりもこれからさらに歴史を積み重ねて洗練されていくことを期待したい。

4　京都芸術大学：瓜生山ねぶた

西川花菜　　尾藤実裕

4.1　調査概要

調査者：佐々木てる　　西川花菜　　尾藤実裕
話し手：箭内 新一
調査日：2022 年 11 月 13 日
調査地：京都芸術大学

4.2　京都芸術大学への訪問

ねぶた師の竹浪比呂央さんが京都芸術大学で、ねぶたの技法について教えていると知り、京都芸術大学を訪れた。京都芸術大学の名物授業「マンデイ・プロジェクト」の集大成で、最終的に瓜生山ねぶたの制作をする。青森ねぶたと、瓜生山ねぶたの関係を造形美と制作技術の観点から調査することになった。調査は京都芸術大学で行われ、箭内先生に話を聞くことができた。

写真 4.1　2021 年の学長賞

4.3　瓜生山ねぶたとは

瓜生山ねぶたは、あえて色彩を省き、白いねぶたとすることで、針金の線や和紙の表情を活かす表現に工夫を重ね、独自の発展をしてきた。12 日という短期間で制作される。配布される LED ライトの数は決まっているため、全作品が同じ条件の材料で制作している。瓜生山ねぶたの特徴は写真 2～4 をみるとよくわかる。

写真 2 では蝶やみかんが制作されているのがわかるが、特に色を塗らないために、繊維や筋といった構造自体を針金で表現している。例えば、みかんのつぶつぶ感がうまく針金で表されている。写真 3 は紙を重ねることで、色が発生していることがよく分かる作品である。写真 4 は針金無しで紙だけで作っている。こうして紙だけで表現することで、独自の技法が発達していることがよくわかる。

写真 4.2　蝶とみかん

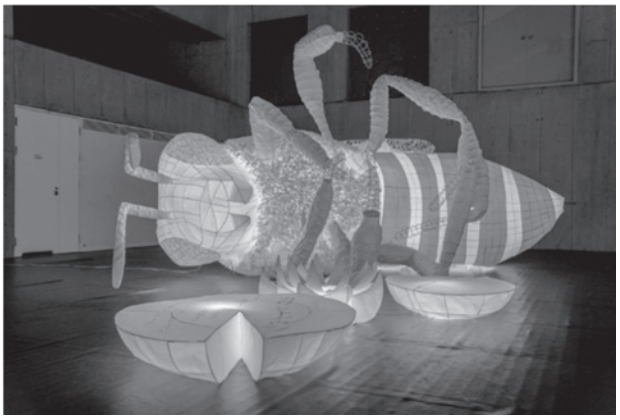


写真 4.3　蜂

写真 4.4　木の枝

4.4　瓜生山ねぶたの現在

木材、針金、和紙のみで制作し、色も蝋も使用しない白ねぶたが特徴である。基本的にはねぶたの技法を用いているが、限られた条件から学生たちが新たな発想を元に独自の発展をしていったといわれている。2022 年の表彰式では学生たちがデザインした瓜生山ねぶたのイラストを手ぬぐいにして配布するという学長からのサプライズがあった（写真 5)。こちらの手ぬぐいを私達も頂くことができた。

写真 4.5　2022 年の瓜生山ねぶたの表彰式の様子。

参考文献

瓜生山ねぶたの HP より「この熱気は、本物。全員集合」＞「瓜生山ねぶた 2022」＞点灯式（https://uryu-tsushin.Kyoto-art.ac.jp/detail/1030）

第二部　聞き取り資料

北海道：八雲山車行列

1　調査概要

日時：2022 年 7 月 3 日

場所：八雲町公民館

話し手：佐藤正之　　佐藤真理子

聞き手：佐々木てる　　西川花菜　　尾藤美裕

2　聞き取り内容

・今年の運行を振り返る

佐々木：昨日はいかがでしたか。何時くらいまで

佐藤（正）：会場を撤収したのは 9 時くらいですかね。運行自体はスムーズにいきまして、だいたいほぼ予定通りです。事故なく無事終われましたので、良かったです。

佐々木： 7 団体で 2 台くらいねぶたがありましたね。

佐藤（正）：あれは内山先生の作品ですね。参加団体の中に「八雲商工会」という団体がありまして、何年かに一度、青森ねぶたで使用したあんどんを購入して、それを乗せかえています。また、別の参加団体が中古のあんどんを買ったのですが、コロナで 2 年続けて山車行列に参加できず、実行委員会に寄付していただきました。全部であんどん 3 体と、見送りの屏風があったのですが、（今年参加した山車には）そのうちの 2 つを乗せました。

佐々木：そうだったのですか。

佐藤（正）：1 体は船に乗せました。

佐々木：今回弘前のねぷたは。

佐藤（正）：（弘前ねぷたのような扇ねぷた）のあんどんはなかったですが、毎年弘前のねぷた絵師の方からあんどん絵の講習会で描き方を教えていただいており、山車の絵は実行委員会が所有している山車に貼っています。先生に描いていただいたものもありますし、実行委員で描いたものもあります。

・山車行列の創世記

佐藤（正）： 私は平成 5 年か 6 年くらいから参加しているはずです。大学を卒業して帰ってきたのが平成 4 年だから、翌年くらいから出ています。

佐々木：20 年以上ですね

佐藤（正）：30 年近くですね。本当の創世記は、私が勝手に言っているのですけど、今は第 3 世代で、（第 1 世代は）今 60 代から 70 代の方々が一から山車を作りあげました。それは「若人の集い」の前夜祭からです。

佐藤（真）：リヤカー4 台ですね。最初の前夜祭、第 1 回の前に 4 台作って、ここからです。

当初はリヤカーだったのが、ちょっとずつ増えていき、団体も増えていきました。

佐々木：山鉾の山がありますね。

佐藤（正）：（当時の山車は）農家の納屋にしまったりしていました。（制作については）台車を譲り受けて、材木も寄付していただいたそうです。材木をいただいた時も、皆で山に生えている気を切りに行き、製材して、山車を作ったと聞いています。今も、いろいろな町民の方々に声をかけて、支援をもらいながら成り立ってできています。

・よさこいソーランの参加

佐々木：今第 3 世代ですよね。

佐藤（正）：今は第 3 世代ですね。

佐々木： 世代が育っていますか。

佐藤（真）： 運営に関しては、若い人たちはまだ少ないです。（第 3 世代）が主になっているかというと、まだ第 1 世代の支えがあって、その上で成り立っています。

佐々木：昨日は KPOP の踊りを披露していたのは高校生ですか。

佐藤（真）：中高生です。

佐々木：中学生もいたのですか。なおかつ「よさこい」の子たちもいましたね。

佐藤（真）：札幌のよさこいソーランのチームです。

佐々木：どこの学生ですか

佐藤（正）： 北大とか。札幌のよさこいチームって結構色んな団体が集まっています。

佐々木：毎年よさこいのチームって来ているのですか。

佐藤（正）：チームは何回目から来ているかな。地域のお祭りにボランティアとして、祭りを盛り上げようとか、「裏方のお手伝いをします」みたいなこともやっているということで「八雲山車行列を手伝わせてください」というところから始まって、もう 10 年くらいたちます。

佐藤（真）：はじめは学生が 8 人くらいで今回のように八雲に来てくれて、大助かりでした。当初は主に山車の引き手や片付けなどの裏方でした。でも「せっかく札幌で踊っているのだから、八雲でも披露してみませんか」と話したところ、踊りを披露してくれるようになり、人数もだんだん増えていって、近年は 30 人以上来てくれています。そういうつながりで今も来ていただいています。

・大太鼓

佐々木： 7 月の第 1 金曜、土曜が開催日ですか。

佐藤（正）： そうですね、第 21 回からですね。この年から第 1、金曜、土曜に変更。

佐々木：昨日の大きい太鼓は

佐藤（正）：勝太鼓ですね。もともとは建設会社さんの持ち物で、団体として出られていたのですけど、その会社の廃業により、八雲町に寄付されて、実行委員会で運行していま

す。

佐々木：（太鼓の）上に乗っていた人達っていうのは。

佐藤（正）：今回は航空自衛隊の隊員です。

佐々木：航空自衛隊ですか

佐藤（正）：それと、もう 1 人ベテランの方ですね。

佐々木：女性の方が乗ってた気がしたんですか。

佐藤（正）：八雲にも女性の隊員がいます。

佐々木：航空自衛隊はどこに基地があるのですか。

佐藤（正）：町内に航空自衛隊があって、飛行場もあります。

・参加団体：NPO 法人

佐々木：その他 NPO 法人の方がいましたね。

佐藤（正）： 障害者施設の方々です。就労継続支援 B 型事業所を運営している NPO 法人です。

佐々木：いいですねお祭りに参加しているというのは。

佐藤（真）：NPO 法人の理事長は山車行列を創った第 1 世代の方で、この NPO 法人は社会福祉の分野といわれますが、福祉の分野だけではなく、社会に参加したりお互いに支えあうという活動をしていて、それは社会教育に通じるものだと思うのです。ですので、積極的に色んなところに参加しています。

佐々木：なぜ社会教育の方々が関わるとことになったのですか。

佐藤（真）：山車行列はもともと青年活動から始まったもので、当時この公民館で行っていた「若人の集い」という青年活動の発表の場を町民の皆さんに PR するために、リヤカー4 台で町の中を歩きました。この時は、あまり評判がよくなくて「高校の学校祭の延長」と言われたそうですが、それじゃあもっといいものを作ろうということの積み重ねで大きくなりました。もともと観光目的ではなく、青年活動であったことから社会教育活動としてスタートしています。

・「若人の集い」

佐藤（正）：（「若人の集い」はもともとは青年活動の発表の場であったものですが）様々な過程の中で、個人加盟の団体として独立しました。「若人の集い」という名前の団体になって、年間を通して独自に自分たちが青年活動として色々な活動を行いながら、その中の一つとして山車行列に参加することで活動を広げてきました。山車行列っていうことの意味合いが、「単なる観光とかそういうイベントではなくて、やはり町づくり・人づくりの活動の一つなんだ」という理念をつないでいっているのが、やはり「若人の集い」です。これまでも、歴代の山車行列の役員、例えば委員長や事務局長、実行委員などに「若人の集い」の関係者が多く関わり、担っているという形で続いてきています。

・山車行列がはぐくむ人間関係

佐藤（正）: 実行委員会としては、（沿道で）見ているお客さんからすると、山車行列の隊列が途切れると「まだ来ないの、まだ来ないの」となるので、できれば流れるような運行ができるようにと考えています。（参加団体にも）「止まってやる踊りもいいけれど、動きながらやる踊りもやってほしい」などのお願いはしています。ただ、どうしても踊りの性質上、1 回止まって曲をかけて整列して踊るという、よさこいソーランのような踊りもあります。盛り上がってくると、どうしても間隔が開いてしまうこともあり難しいのですが、そこは気をつけています。

私は職業が酪農なので、普段、例えば商工会の関係の人とは会わないのですが、山車行列に参加していることで、祭りが近くなると、町で人に会ったときに（共通の）山車の話ができます。その前後（の日）だと「そろそろ山車が近づいて来たね、準備はどう、進んでる？」とか、別の参加団体の人とも「（うちの団体は）まだこれからなんだ」「今練習してるんだわ」とか、山車が終わってからでも会った時に「終わったね」とか話すこともあります。町民の方から「いつも頑張っているよね」など声をかけていただくこともありますし、山車に参加していた人とばったり会った時に「あの時（山車に）出てたよね」といった話が普段合わない人とできたりとか、ちょっとしたことで声かけしたら意外と仕事に関係ないんですけど、実は繋がっててとかっていうことがあったりするんですよね。この前も、牧場で機械トラブルになって人を呼んだら、「この前山車を一緒に引いたよね」みたいなつながりがあったりしました。

佐藤（真）: 職種が違うと、町でもなかなかあの会わないこともあるけどね。

佐藤（正）: 役場とか、病院といった団体など様々あるので、そういう意味では、山車に関わることで人間関係が、人間関係ってまでいかないにしても知り合いが増えるっていうね。そうすると、なんかあったときにお互いに助けてもらうこともあるし。なんですかね、暮らしやすいって言ったらあれなんですけども、そういう小さい町ですからね。（小さな町ですから、町民の顔が見えることが暮らしやすさにつながると思います）

・山車行列のテーマ性

西川 : 今年ウクライナの情勢とか、色んなテーマとか山車ごとにあったと思うんですけど、毎年そういうのはあるのですか。

佐藤（正）: そうですね。テーマ性って言うのは、毎年考えています。やはりその時の社会情勢のこととか考えて、今回は何年か出来なかったっていうのと、戦争のこととかですかね。それから、山車を作るにあたって、いちばん多いのは十二支ですかね。「2 年連続中止はつらいよ」って、「男はつらいよ」と、寅年で、トラさんをかけて作りましたね。上手く考えていますよね。ちょっとひとひねりしました。

佐々木 :「男はつらいよ」から来ていたのですね。あと今年のテーマは平和。

佐藤（正）: そうですね、例えば震災があったら応援しようとか、そういうのは決めていま

すね。あとはもう団体さんにおまかせしていますね。「あんどんのどこかに、書きましょう」とゆるく共有している感じですね。

富山：福野夜高行燈祭

1　調査概要

日時：2022 年 5 月 2 日（月）

場所：富山県南砺市福野　春の屋

語り手：布袋泰博　　河合秀和

聞き手：佐々木てる（青森公立大学）　　成田葵葉／飯田栞音（青森公立大学学生）
竹浪比呂央（竹浪比呂央ねぶた研究所）　阿南透（江戸川大学）

2　聞き取り内容

・山車の色使い

布袋：お祭りは見られたことは。

佐々木：僕は初めてで、びっくりしました。

布袋：でもねぶたの方が迫力あっていいでしょ。

佐々木：色使いとかとても綺麗で。ピンク(町内によっては«ぼか»という呼び方)が各町にあって。

布袋：基本は赤をベースにしていて主に 5 色。ピンクと青と黄色。あと青竹っていう竹色の濃い色を入れたりして 5 色をメインとしています。あとそれを薄めたりして、絵の具のように掛け合わせたりして、オレンジや紫にしたり茶色になったりしますけど。そうゆう風に各町内、色の個性を出しています。

佐々木：色使いは昔からですか。いつぐらいから今のようになったのですか。

布袋：色は昔からですね。（形は）昔はそんな細かい細工というのはなくて、大雑把な形の、平面的なものが多かったです。あと時代に合わせて戦車の形があったり。／／佐々木：せ、戦車？戦車の形？／／そう。戦車を山車にしたような。凱旋門を山車にしたり。その時代によって色々な各町内の歴史があります。私が知っている限り、1973 年に、東京大銀座祭に福野の夜高が招待されて。大行燈 4 基練り廻しました。その後、富山市、名古屋市、香川県多度津町、京都市など。近年は、武蔵野市吉祥寺、そして、2011 年には初海外。フランスのリヨン市の光の祭典に大中小 5 基の行燈が遠征したことがあります。また、1996 年に阪神淡路大震災復興応援に神戸市光のパレード、2013 年、2017 年には東日本大震災復興応援に福島県南相馬市の相馬馬追祭りのパレードに参加させていただきました。

・制作者：厄年と役回り

佐々木：制作されている方は、若い人たちがみんなで作っているのですか。

布袋：そうですね。各町内の高校を卒業した 18 歳以上。／／佐々木：高校卒業が目安／／はい。そうですね。最近は低年齢化して、高校生に来てもらったり、その町内によって

早い子はいますが。基本は高校を卒業した頃からです。それで、この祭りは他の祭りとちょっと違うところがあります。メインは「若衆」というくくりの方々で、その若衆というのはだいたい 25 歳の厄年。男性だったらそうですけど。それを頂点にして若衆が主体で成り立っています。それで 18 歳から 20 代後半までのメンバーがメインで作っています。その上に裁許という祭全体を采配する(丸提灯もった人）がいるのですが、それは 42 歳の厄年の男性です。

佐々木：厄年にあてるというのは、厄払いの意味も含まっているのですか。

布袋：そういう意味もあるのですかね。

佐々木：昔からですか？

布袋：昔からそんな感じで、その辺の（年齢の）方が役どころをされていますね。

佐々木：分かりやすいですね。「今年厄年だから提灯持って」とか。

布袋：そうそうそう。でも、「まだお前ちょっと早いんじゃないか」とか、町内によっては「60 近いのにまだするのか」とか。

佐々木：そっか。60 歳でもまた厄年が来ますからね。

阿南：ちょうど適任者がいないと、そうなったりもします。

布袋：そうだね。だんだんとね。昔は同級生とか人が多いから、やりたくてもやれなかった世界だけど。今はお願いしてやって貰ったり、2〜3 回やってもらう感じで回さないとできない状態が十数年前から続いています。町内によっては、担ぎ手がいなくて、かつては新聞で募集する町内もありました。

・制作期間と制作手順

佐々木：制作の開始はだいたい 2 月くらいからですか。何月くらいからスタートしますか。

布袋：はい。各町内制作を始める前に、公聴会を開きその場で今年の予算、役員などの承認を受け、その後、早いところだと 2 月の前半から始める町内もありますけど、だいたい 2 月の後半から 3 月の第一週で始めるところが多いですね。

佐々木：制作工程でいくと、何からどうスタートするのですか。

布袋：基本、骨組みというか、竹細工は毎年作り替える訳ではなくて、前年壊しあって破損したところを補修するところから始まります。大きく変わる年もありますが、釣物（つりもの）といって、田楽の前後に吊ったがものあるのですけど、そこだけを新しくすることもあります。7 町内各々、歴代顔となる山車の形があります。御所車(浦町)、大黒様(横町)、高御座(上町)、神輿(新町)、花車(御蔵町)、宝船(辰巳町)、屋形船(七津屋)。作業に余裕があったり、作り手が揃わないと出来ないところもあると思うので。基本的にはそんなに変わらないです。前年の前の紙を全部破って、そこからスタートですね。

佐々木：前年のものを全部剥がすのはたいへんですね。

布袋：ねぶたの場合はボンドみたいな感じでやられるとお聞きしました。こちらは壁紙用のりを使用し、水で溶かしながらハケで伸ばしていく。障子紙をはるという感じで。その

後、自然乾燥し、蝋引き前に、水で霧吹きます。

佐々木：紙はどのような紙ですか？

布袋：和紙ですね。

佐々木：和紙ですか。何人くらいで作業するのですか。

布袋：作業はだいたい 10〜15 人かな。あとは経験者が、役割分担がありまして。竹細工が上手な人の担当。電気配線の担当。あと蝋引きと言って、実際絵を書く人。この 3 つはちょっと特殊な、専門的なところになるので。若い順に入った人から徐々に、「この道ちょっといいんじゃない」とか、「この道はお前続けてやってみたらいいんじゃない」とか、そういう積み重ねをして。自分なりに聞いたことや、伝統を引き継いでやっていく。電気にしても竹細工にしてもそうです。紙はりと色塗りは皆で作業するっていう形です。紙貼って、蝋引きをして、蝋引きが終わったところから色塗りをしていきます。

・分担する色塗りの作業

佐々木：トータルで凄く綺麗なので、みんなが勝手に、適当に色を塗っているわけではないですよね。

布袋：ではないですね。

佐々木：誰か指揮しているのですか。

布袋：それは若い衆の人たちが。18〜25 歳の。

佐々木：「ここはこの色で」とか。

布袋：そうですね。でもまあ、各箇所写真撮ったりして、資料残っているので。「ここはいつもこの色だね」「この赤だね」「ここは青だね」とか。基本は決まっています。

佐々木：毎年作り直しはするけれども、できてくるものは……

布袋：同じものを、基本同じものをつくっています。「ここにはこれが書いてある。この色でいく」というのは変わらないですね。

佐々木：上から吊ってある（釣物）ものは、あれは、どなたかが手作りしているのですか。

布袋：そうですね。細かい部分は番線で加工して作ったりするところもあります。ただ、番線だとやはり紙を貼るのは細かくて、みんな嫌がって、昔ついていたのを取り外してやりだすこともあります。

・制作場所

佐々木：18〜25 歳くらいの人が、毎年これに関わって、技術が進んでいくわけですね。

布袋：年に一回しかないのですけど、ねぶたの職人のように毎年新しく制作するわけでなく。だから、ちょっと離れてみると綺麗だけど、よく近づいて見ると、結構大雑把だなっていう部分もあります。

佐々木：日中仕事終わって、小屋みたいなところに行ってみんなで制作するのですか。

布袋：ええ。公民館とか、会館があって。

佐々木：会館とか。その辺にいろいろ小屋が出来ていましたけど。
布袋：どこに。
佐々木：歩いてきたら、小屋っていうのですか、なんかビニールの、、、
布袋：それはこの 3 日間の管理の足場です。雨が降ったり風が吹いたりすると困る。あと道で作業すると危ないので。昔はもうみんな路上でやっていましたけど。うちの町内も路上にいますけど。そういう敷地があれば足場つくれます。
佐々木：それなりに高さがありますよね。
布袋： 6～7m 弱です。6m80 とか。電線の高さよりも低くしないといけないので、結局そこで高さが制限されます。
佐々木：制作過程としては、作ったものを上に載せるのですか。それとも上にのって、作業するのですか。
布袋：「組み立て」ですか。／／佐々木：はい／／「組み立て」は台があって、台の上に一本こう芯（木）があって（垂直に）差しています。その芯（木）の上に留め位置があって、山車を留めるあの大輪みたいので締めて、それを一つ一つ上からこう山車を差し込みます。
佐々木：差し込む感じなのですね。上からこう合体させていくのですね。じゃあ、一つ一つ別々に作って、最後に上からのせていくのですね。それは大変ですね。
布袋：そうですね。殆どがレッカーであげですが、今もレッカーを使用しない町がありますが。電信柱に引っ掛けて、それをみんなで引っ張りあげる。これをおこすのが、まだ一町あります。
佐々木：面白いですね。いわゆる台上げですね。
布袋：そうです。そうです。
佐々木：それはいつくらいに行われるのですか？
布袋：それは 4 月、ほんとに先週（4 月下旬）ですね。立てるのは昨日（5 月 1 日）でした。当日の朝。昨日雨の中やってた。
佐々木：皆さん総出で。
布袋：まあ、ちょっと早い町内は前日に立てて足場の中におさまっている町内もありますけど、基本みんな 1 日の早朝に組み立てています。

・棟方志功のねぶたを修復

佐々木：棟方志功ゆかりの地と伺ったことあるのですけど。
布袋：そうですね。棟方志功さんって南砺市の福光という地区があって、そこに疎開していた。その縁があって、棟方志功の美術館（「福光美術館」）もあります。（福光には）「なんといっぷく茶屋」という道の駅がありまして、そこに棟方志功さん（の「ねぶた」）が置いてあったのです。それで 6 月の「かっぱ祭り（だまし川のほたるとかっぱ村祭り）」というイベントの時だけ（棟方志功のねぶたが）出されて、夜になると点灯して

運行されるっていうのがありました。（そのねぶたを）たまたま、道の駅の方とお話して、「もう 10 何年たつから、ちょっとこれ（ねぶた）直してもらうことできるかな」と言われて。「福野のあんちゃんなら、なんかできるだろ」と軽く言われて。実物見てもいないけど、「行燈ならなんとかできるだろ」と簡単に自分も受けよってしまったけど。結構やっぱ現物を見て紙を剥がすと、「こりゃ大変やな」と思いました。

佐々木：では全部紙を 1 回剥がして、上から紙をつけ直して、色をつけたのですか。

布袋：はい。本当は「何人かで制作するか」と思ったのですけど、自分一人でやると決めたから。一人でやってやると言うか。

佐々木：ねぶたの技法とか、どうやるかというのも当然知らなかったのですよね。

布袋：ネットで調べて。映像とかもいっぱいあって、「こうやってやるんだ」と思って。なんか賑やかで興味があるし。自分でやって。

佐々木：紙は、福野（の山車）で使っている和紙を使用しているのですか。

布袋：はい。そうですね。「五箇山」っていう地区があるのですけど。そこは国に（「越中和紙」と総称して国の伝統工芸品に）指定されて販売もしているのです。今の福野の祭りもそこで和紙を買っている町内もありますし、うちの町内もそうなので。ちょっと実際行って、前の破った紙を持って行って、「この質の紙ってどう」「できる」といろいろ話をして。「一緒のものじゃないけど、多分このあたりかな」とか言って頂いて。「じゃあこれでいこう」という感じにしました。

布袋：だから、最初こういう感じでいっぱい開いてみて、これが最初のおおもとですよね。それで「なんとかこのイメージを残したいな」という気持ちで。とにかく毎日毎日、棟方さんと睨めっこしながら、顔見ながら、制作していましたね。やはり顔が変わるとイメージ変わるし、

佐々木：ですね。

布袋：顔にだけは「ちょっと、なんとかできんかな」と思って、いろいろ苦労しました。ただ、あの行燈はやっぱロウ引きは結構補修きくというか、失敗してもちょっとこすってシワ取ればできるという、1 つ書くと失敗した方が。

佐々木：そうですね

布袋：なので、一発勝負のとこもあったのですけど。

・和紙について

佐々木：何が一番苦労されました？

布袋：やはり紙貼りですね。思っている以上に難しいから時間がかかりました。やはり行燈だと 2~3 枚貼るだけだから、そうそう。湾曲しているから、真っ直ぐはるとどうしてもでこぼこしてしまう。せいぜい貼って 2 枚 3 枚。細かいところは 1 枚ずつこう貼っていく。で、のり白がないので、

佐々木：確かに。紙貼りのお母さんたちは、青森では、ぱっぱ、ぱっぱとやってるけど、難しいですよね。

竹浪：青森では昔は竹でしたので。作りが大雑把でしたから。まあそれも今から50年くらい前の話しですけど。竹は割ってもらうので。「二分に割ってくれ」「三分に割ってくれ」と。幅があるので、のりも付けやすいですし。紙貼りやすいのですけど。今はもう完全に針金ですから。まあ言い方ちょっと変なのですけれども、紙で彫刻を作るような感じです。ですから紙貼るのもみんな昔から誰か手伝ってくれて、子どもからなにから、みんなで。でも今はもう紙貼りの専門プロじゃないと、とても貼れないですね。

布袋：そうなのですね。難しいですよね。

竹浪：まず貼る前にどんな形になるのかイメージして、膨らませるのかへこませるのか。で、膨らませるときは和紙のところを少し水で伸ばして貼ったりとか。ですから、のりで付けてから紙を貼ってるのじゃなくて、全部型取りするのですよ。今では紙を貼って色を塗らない真っ白な白い石膏像のような、灯りの白い造形として、それを作品として出したりしているくらいですから。

・雨対策

竹浪：ちょっと教えて頂きたいのですけど、こっちの紙は水には、つまり雨には強いのですか。

布袋：弱いことはないですけど。

竹浪：雨降ったときは、これはどうされるのですか。

布袋：雨降ってもそのままです。1日か2日、この2日間は。

竹浪：破れたりしませんか。

布袋：破れたりはしますけど、雨で穴が開くことはないです。それくらいの強度はあります。

竹浪：この五箇山の和紙って、これ手漉きの和紙ですよね？

布袋：手漉きです。

竹浪：上等の和紙だと、（水にぬれると）漉く前のどろどろになってきたりするじゃないですか。

布袋：楮（コウゾ）が溶けだしたりとかですか。それはないですね。

竹浪：今、青森では業務用の障子紙って。ロールの幅90センチの紙を使って、雨降っても大丈夫なように。ゲリラ豪雨でも大丈夫なような感じのものを使用しています。昔はあの、まあ今でも使っている人いますけど、四国の奉書紙ですね。機械漉きの奉書紙です。あんまり手漉きの上等なものだとすぐ雨にやられてしまうので。昔一回ゲリラ豪雨みたいなのがきて、最終日のお昼だったので良かったのですけど。針金に、つららのように溶けて、紙が。それで私「これじゃいかんな」と思って業務用の障子紙を使うようになりました。

布袋：あのたぶん福野も（紙を）厚くしようと思ったら出来ないこともないのですが。光を

灯したら色が変わってしまうので。

竹浪：そうなのですよね。

布袋：だからできるだけ、電気の球が「点」にならないほどの厚さで、ぼやっとするような紙が必要です。

竹浪：結構、薄いのかな。昨夜拝見していて、灯りの位置、ソケットの位置が分かるようなものもありましたから。

布袋：あります。

竹浪：それで、この薄さだったら「雨降ったら破れてしまわないのかな」と思っていたんですけど。

布袋：結局その後、紅で色塗るので。それで結構もたせている。蝋と一緒にもたせている感じですね。

染料

竹浪：色は粉の染料ですよね？

布袋：そうです。そうです。

竹浪：さっき青竹っておっしゃっていましたけど。あの青竹、油が浮いてどろどろになりますよね。

布袋：そうそうそう。

竹浪：アルコールちょっといれると溶けやすくなるのですけどね。今青森では青竹とか使わないで、酸性染料はちょっとどろどろになって筆がだめになっちゃうので。塩基性の染料があるのですよ。それを使っていますけども。ただ雨で今度は流れませんか。染料。

布袋：分かります。赤色なんてすぐ落ちます。

竹浪：ですよね。

布袋：真っ赤ですよ、下は。

竹浪：特別に、にかわとか入れないのでしょ。

布袋：入れないですね。

竹浪：にかわいれると色止めにはなるのですけど、結局染料でばあっと塗っちゃいますよね。ですからさっきの雨降って紙が破れたって。鬼のねぶたを作った時にもうみんな曳き手が赤ワイン頭から浴びたようになっちゃって。ですから最近は染料、でもどうしても赤とかあの鮮やかなのは染料じゃないと無理なのですよね。それで私、その赤に少しアクリル系の破水効果のある絵の具を混ぜて。それで、あのアクリルがあまり多すぎると、鮮やかな赤が出てこないので、あれは絶対染料じゃないとダメなので。混ぜて少しは色止めになるように、時には「にかわを」いれたりとかですね。でもどうしてもそうですよね。流れますよね。

布袋：はい。流れます。

河合：防水スプレーとかはダメなのですか。

布袋：防水スプレーも昔やったことがありましたけど、ダメでしたね。逆に水が溜まってしまって、「ばっと」流れ落ちるから。「普通に流れ落ちた方がいいんじゃない」ってなりましたね。
竹浪：うんうんうんうん。
布袋：自然に任せるのが一番いいという。

・優美コンクール
佐々木：期間、「2 日間もてばいい」というのも、ちょっとあるかもしれないですね。
布袋：そうですね。なので今日。
河合：昨日、今日なんか、にわか雨降るけども、昨日さえ終われば、もう自然に任せて。
布袋：初日は優美コンクールがあるので、
佐々木：コンクール。あのコンクールはどういう形で。担当の方がみて回るのですか。
阿南：審査は、審査員はどんな感じでしたっけ。議員さんとか。
河合：議員さんとか、校長先生とか、だからほとんどが町外の人で。
佐々木：夜こう運行しているのを見て決めるのですか。チェック入れる感じで。
布袋：6 時半に皆が集合するのですよ。それでで、並んだら、しばらく止まるので。そこでしばらく見ています。
河合：一応（審査基準）あるのです。でも全然わかんない。
佐々木：その制作したものに対する賞だけですか。なんかこう上手く「練り回し」たりとかいうのはないですか。
布袋：優美コンクールなので。
河合：見た目のあれだけで。
佐々木：なるほど。見た目の美しさというので。
河合：「練り回し」とか喧嘩は、もう自分たちの町内が一番やと思っているから。
佐々木：決められないですね。
布袋：そこで点数つけられても困るからね。
河合：そうそう。大変なことになるから。

・引き合い
佐々木：あの「引き合い」という喧嘩、壊しあいは、祭りが始まった頃からあったのですか。
布袋：昔からあったという感じですね。
佐々木：自然発生的に。
布袋：大正、明治でもう既にあったのではないですかね。
佐々木：すれ違うときに。
布袋：昔は平じゃなくて、ほんとに担いで、下が砂利なので、みんな担いでそれをそこまで持って休憩しながら、こんな感じでやって。

河合：15～16m あったから。もっと高かったから。だから障害物ないかなって。
布袋：今は電気だから、バッテリーとか付いているけど。昔はロウソクなので。
佐々木：そうですよね。
布袋：燃えたらそれで。そういう世界です。
佐々木：ロウソクだと火をつけるの、結構上の方だと大変ですね。
布袋：今はもうロウソク使ってないですけど。そうですね。
佐々木：まあなんかどこも大型化していく時期あるらしいですね。高さをどんどん競い合って。
布袋：結局電線があって。昭和になって規制がかかって。それで通らなくなったって現在の高さになったんですね。

・制作にかける想い：観光と祭の間

河合：福野の祭りのいい所は、自分たちが仕事終わって若い衆疲れて。2 月くらいから 2 ヶ月間かけて 12 時くらいまで作るのですよ。それで、一生懸命作って疲れて、作った自分たちの芸術品を自分たちが潔く壊す。2 ヶ月半かかって作ったやつを 30 分だけで壊す。それを金沢の人がみて、「潔い」って。金沢は百万石まつりみたいなものしかないから、「こんなすごい祭りあるんだ」ってファンになって。2 ヶ月半のものを 30 分で壊す。しかも芸術品を。「自分たちの手と足で壊す」というのが潔いって。
布袋：やっぱり自分が手がけた分、自分の色塗った部分はやっぱり気になるのですよ。
河合：もちろんね。
布袋：そこが人から見たら全然見えない部分だとしても、そこになんか気持ちが入り込んで、毎年そこは自分が担当だって。そういう、誇り持ってやっています。仲間意識がそこでできるのかな。
河合：極論すれば、観光客はどうでもいいって言うか、自分さえ良ければいい。とにかく自分たちが一生懸命作ったものだから、言ったら観客ゼロでもいい。自分たちが楽しいのが好き。一回ね、先生にも言うたんやけど、20 何年前に、昔ですけど全国の祭りのカメラ撮っとるプロのカメラマンの人がシャッター向けても誰もこっち向かなくて。若い衆が一生懸命やっとる。大体、今の時代やから、みんな芸能して観客優先でなんかポーズとらなくても目とかで分かる。カメラマンは。「この町の若いもんはすごい」「自分さえ良ければ」と祭り一心で。だから凄い。そのカメラマンはずっと来ていますよ。昔からそんな感じだから、とにかく自分さえ良ければいい。まあ極論すれば。
佐々木：まあ本当の意味で自分たちのお祭り。
布袋：そう。本当に命かけていますよ。

・観光資源としての側面：女性の参加

佐々木：まだこう人にお客さんが来たからその人たちに見せるそういう祭りではない。でも

観光資源には一応なってる。

布袋：そうなってますよ。

佐々木：間違いないです。

河合：祭りとは神事なので、神事と観光の半分半分で両立なので。神事なので男性しか繋がれないし、女性は繋がれないし。この町内の氏子しか繋がれないし。この旧町部っていうか、この繁華街だけで村部の村と繋がれない。行燈に女性も。だからその発展性はないのだけど。「それじゃあ駄目だ」と言って、昔の観光の行燈を作ったり。あの立佞武多みたいな乗っける行燈作って、女性でも子供でもほかの町からでもみんな繋がれるような観光行燈を作ったこともあったのです。

佐々木：そうなんですか。結局でもそれも。

河合：人材不足で人がいなくて

布袋：3 年前まで、平成最後。コロナ前まで。

佐々木：一応やっていたのですか。

布袋：2000 年から 20 年間やっていました。

佐々木：そうですか。

河合：立佞武多の真似をして。

布袋：前夜祭というものを作って、その 29 日、30 日の日。

河合：前夜祭で観光客を。

布袋：駅前のロータリーからちょうど電信柱を地中に埋めたので、高さがあっても通れる通りが 200m くらいあるのですよ。そこをちょっと往復するような。

・子どもたちへの影響

佐々木：小学生、中学生ぐらいから、「いずれ作るんだろうな」とかそういうイメージ持っているわけですよね。

布袋：そうですね。

佐々木：もうその頃に、小さい頃から作ったりとか、色塗ったりとかしていますか。

布袋：多分それはあまりない感じ。それは小学校、学校の方でそういう武者絵教室みたいなものを授業で取り入れて。地域がねぶたのちょっと上手なお母さんが学校に出向いて、教室でねぶた書いて行燈みたいなものを作って。

佐々木：あるんですね。

布袋：やっていますね。

佐々木：あと、やっぱちょっと（山車の）上に乗ってみたい気はしますね。

布袋：皆そうです。自分たちもそういうふうに育ちました。やっぱり、昔はともかく、最近はもう行燈には中学生は乗れない。小学生が困ると。中学校になると大きい行燈に乗れると、繋がれると。そういう子供たちもいっぱいいたから。今もう少ないから。とにかく「どっちでもいい」とか言っていたけど。昔はそれで中学生でないと大きいのには乗

れないから。ドキドキしながら、「来年は遂にこれに乗るんだぞ」とか。
佐々木：面白いですね。ずっと続いているとそうなのですね。

・太鼓の演奏について

布袋：あと、一番子供たちに根付いているのは太鼓です。太鼓と笛です。それの競演会が 29 日にあるのですけど。今年で 43 回目。私が、自分がちょうど小学校 5 年生の時初めてあったのですけど。それが昭和 52 年から続いていて。小学生低学年、高学年の部、中学生の部、4 人で 2 台の太鼓を使う揃い打ちの部、4 部門があって。それぞれのペアになって競演会をやります。そのためにみんな 4 月なったら、その街の子たちは太鼓の練習、笛の練習はじめて。それがずっとずっと繰り返されて。大人になって子供ができてその子供がまた演奏してっていう。そういう音楽の流れができていますね。制作、行燈を作るみたいに。
佐々木：太鼓のサイズは思ったよりも小さめですか。
布袋：そうですね。多分。厚みまあこれぐらい。60cm ぐらい。なので、綺麗に叩いて。二人一組になって。一応競演会で叩いたメンバーで叩いてやったりして。
成田：昨晩、浦町の法被着た方が即席で太鼓を叩いていて。酔っ払っていてもちゃんと叩いていて。それってやっぱり小さい頃から練習してきて、身についているのですか。
布袋：ですね。いきなり叩くのはできないと思うので。昔叩いた経験があるので、自分も叩きますけど。やはり叩いた経験がある人は叩きたいし。楽しいイメージもある。盛り上げは太鼓があってこそ、やはり。どこかで太鼓の音が鳴ると、「ああ祭りだな」というイメージは皆持っているので。祭り終わってしばらくは、太鼓の音がずっと耳から離れなくて。「どこかで鳴っとるんやないか」というくらい、錯覚すら起こすくらいの。そんなイメージはありますよ。

・ロウ引きについて

竹浪：ロウを担当されてるという。ロウ引きですね。あのロウの鍋というか、溶かす機械というか、どうやって溶かしていますか。
布袋：あ、土鍋（ゆきひら）でやっていました。
竹浪：土鍋？
布袋：昔は、土鍋でやっていたのですけど。／／竹浪：電熱機で温めて？／／ガスコンロでやっていましたね。
竹浪：火出ませんか。
布袋：火出て、割れたりして。それでもう数年前から電熱線のやつに各町内、変わっています。
竹浪：あれですよね、上に登って書いたりとかということはないのですよね。下ですよね。青森の場合は上にあがったりするので。昔はホーロー鍋を電熱機にかけて。まだロウを

上手く書けないような若い連中が、下で「沸きました」と言ってわたしてくれて。かなり熱くしないと（ロウ溶けなくて）、書けないじゃないですか。今は、ちょっと線が煩わしいのですけど、ろうけつ染用の「メルポット」っていうポットがあるんですよ。サーモがついていて。あれを使っていたのですけど。ずっと使うとすぐイカれてしまって。

布袋：すぐ故障しますよね。

竹浪：ええ。それでうちのスタッフが 1 人用の小さい天ぷら鍋。電気の。あれも何度って温度設定できるので、あれ今 5、6 個買って。ネットで買って。それでやると絶対火は出ないじゃないですか。ガスコンロでやるとすぐ熱くなって、使いやすいですけど、気が付かないともう火が入っちゃって。火事になったりすると大変なので。ねぶた小屋でもよく火出したりしていたのですよ。うちはなかったですけども、だから電熱機。絶対ガスコンロは駄目だよということで。

布袋：目配りしてもなかなかね。

竹浪：だからどこがどうやっているのかなと。それいつもこういうロウがきを使うところの皆さんに。あれが大変で。少し溶けたぐらいだったら、もうすぐ白くなって。全然明かり入れても光らないんですよ。

布袋：パラフィンとか使われているんですか？

竹浪：パラフィンです。

布袋：全部

竹浪：はい。

布袋：うちの町内は、パラフィンは使ってないのです。

竹浪：ろうそくのロウですか？

布袋：そうです。白ろうだけで。町内によってはパラフィン入れるとこもありますけど。パラフィン入れるとどうしても何か（味がでないというか）。白ろうの方が焦げ付いた、黄色びいた色合いの方が、なんか味があって。それを使っていますね。まあ壊さない程度に。パラフィンはもうほんとに透き通った感じになる。

竹浪：そうです。だからロウはちょっと苦労するのですけど。ロウの線は、なかなか大切ですから。あと色を塗るのは全部筆、ハケだけですか？スプレーは使わない？

布袋：筆です。スプレーは使わないです。なので、スプレーはないです。逆にこの辺りで田祭りをやっている、庄川とか井波とか砺波とかは、スプレーでやったり、いろんな方法で。ちょっと福野には考えられないような方法で、光ってみたり、煙を吐いてみたり。だから、そういうのもあるのですけど。そういうところで楽しんでらっしゃいますけど。まあそういうことは。

竹浪：あと今もう拝見してきたのですけど、武者絵にしても昨日と実際の燈籠も興味あるのです。かなりちょっと近づいて見ていたのですけど。綺麗にぼかしができているのですけど、あれはやっぱり水で色をつけて、綺麗にグラデーション、ぼかしていくのですよね。

布袋：はい、水で。
竹浪：ええ。それは一緒ですね。はい。

・家々に飾られる燈籠

佐々木：昨日、通り歩いたら燈籠が家のところについていて。「ぼわーん」としていて。それでこれは「ちゃんとロウがきしているのか」という話をしていたのです。あれは各ご家庭の方が一生懸命こう書かれて、色とかこうつけられているのですか。
布袋：四角のですか。ああ、それはたぶん商工会か商店街で、配られたやつを、みんなかかげている。たぶんそこの町内、大きい何かちょっと見られます。軒先に置いてあるのですけど。それはそこの町内だけ作ろうってやってらっしゃる。
竹浪：印刷なのかな、みたいなのもあれば、ちゃんと墨とロウが入った手書きだなというのもある。明かり入って光ればすぐわかりますからね。
佐々木：それをこう町内で一括して作って配っているという感じですかね。
布袋：最近では、もうだいぶ前のやつを持っていて。国旗掲揚するような感じで。
佐々木：祭りだからこれ。結構暗い中あれだけこう、掲げてあると、あそこの通りだけすごく綺麗で、すごい風情があって、面白いですねこういうのは。しかも四角で、提灯じゃなくて燈籠ですね。
布袋：結局、行燈とは田楽がメインなので、みんなそれがメインの飾りものです（□田楽：田植えの前に豊作を祈る田遊びから発達したもの）。
佐々木：飾りと言うのですね。その曳山とか、明日出るやつとはまた違って、神様が降りるような。何かがあって落ちてくるのではなくて、結局神様を出迎えるための明るく、非灯がついたものがこう町内をまわって。神事ですね。
布袋：神事なのです。ちょっと灯すだけじゃ面白くないから、いろいろ飾りがついたり、町内によっても形ができているという感じです。

・神事としての側面

佐々木：行燈が出る前に、神事としての何か行事はあるのですか。
布袋：ありますよ。
佐々木：それは具体的にどんなこと？
布袋：昨日、まああの結局各町内オリンピックじゃないですけど、今お宮さんで火をおこすのですよ。火起こしして、火起こしした火をみんなに分してそれを町内に持ち帰った火を一応、大きい行燈の一つの提灯に灯して。みんなで分け合って、というようなことをやっています。なんか昔はそうじゃなかったのだけど、なんかやっぱりそういった部分、歴史があって、その迎えに行った火がここで止まるのではなくて。それが「行燈に灯ってこそ何か意味があるのではないか」ってことで。十数年前にこういうことやろうって。今まだ続いていますね。そうです。

佐々木：なんかこっち神楽とか獅子舞とかは？

布袋：獅子舞はありますよ。獅子舞は秋。ここは町部は9月の8日に秋祭りがあり、そのときに獅子舞が。

佐々木：年間通してお祭りというと、この時期のこう夜高行燈の祭りとそれ以外獅子舞と。

布袋：そうですね。町部はこの二つですね。神事的に行われるのは。

・近隣地域の祭

佐々木：砺波だと田祭りですか？

阿南：田祭りです。

佐々木：ちょっとまた色々変わって。でも出てくる行燈は割と似ているのかなあという。

布袋：皆さんいろいろ工夫されているけど。

佐々木：写真とか見て。えらい綺麗で1回見てみたいなと思ってずっと気になっていて、ようやく福野に来られたのですけど。

布袋：良かったですよ。今年は、一番違うのは露店がない。ないので初めてです。だからそれと人通りもちょっと歩きやすいと思うのです。昨日にしても。いつもごった返す。それこそ密状態の状態であるので、今年は広告宣伝をせずして全くせずに、来る人は来てくださいっていう。ただ「露店もなんにもないです」って。

・引き合いのルール

飯田：今日突き合わせって、喧嘩あるじゃないですか。一応喧嘩じゃないですか。それって勝ち負けとかって、これやったら勝ちとかあるのですか。

布袋：その綱引きとか押し相撲じゃないので、結局他のお祭り、砺波とかその近辺にあるところは正面から立ちあうことをやっているのですよ。福野は車と一緒。車がすれ違う。すれ違いざまに止まっている行燈。必ず上りと下りという、ここの人たちにとったらルールがあって。新しい入町、町内に入町する行燈は上り行燈。で、一回戻ってくる行燈は下り行燈。例えば、坂道と一緒で「下り行燈は止まってください、上ってくる行燈が優先ですよ」。という感じのルールはあります。ただ、上っていく行燈が動いているときに、もうガサガサっと始まったり止まったり。それは何故かと言うと、福野の神様は喧嘩好きな神様だと。誰言ったかは分かりませんが、それはそういうこじつけでお互い楽しんでやるっていう話だと思うのですけど。それが、喧嘩が始まるきっかけ。結局その、「御神燈」という文字が書いてありますけど、「神様いますよ、燈籠ですよ」という（□神の宿る神聖な部分。この部分は「田楽」と呼ぶ）。「御神燈」と書くのですけど、「御神燈」同士がちょうど重なったときにだけ、その時に「そういうことをやってください」「重なってもいないのにやったら駄目だ」とか。そういうルールは、知っている人は知っているのですけど。まあちょうどすれ違いざまに、動いている行燈が来た時にガサガサと。やりたければこちら止まるし、やりたくなければこのままスっと行ってし

まうとか。それを行かせないように、逆にこっちの行燈はこうだったら、山車を、台を曲げてみて、当然落ちてちょっと意地悪して。ほんなら動き止まるでしょ。したら田楽もちょうど合っているし。ここでやれるな。などなど。

佐々木：あんまり広い道でもだめですね。道幅はちょっと狭いぐらいがちょうどいい。

布袋：その通り、ちょうどいい。

佐々木：ぶつかるぐらいの、すれ違いざまに。

布袋：倒れることもある。ちょうどうちがもう昭和60年ぐらいの時に、うちの行燈倒れました。倒れて家にもたれかかって「ガシャーン」いうて。で、またみんなで起こすぞって起こして。

佐々木：家壊されて（笑）。

布袋：そういうときもあります。結局片側に人いないから、揺れすぎて。重心がほぼ全てこういったのですよ。

佐々木：大体引き合いは何分ぐらいとかあるのですか。

布袋：時間はあんまり決まってないですね。もう疲れたのでやらない。そういう世界です。

佐々木：なるほどね。

阿南：さっき倒れたとおっしゃいましたけど、倒れたときはその後どうしたんですか。

布袋：もう初の経験だったので皆さん。それをみんなとにかく押せと言われて。

阿南：喧嘩はそれで終わり？引き合いも終わり？

布袋：そうですね。もうそうです。

阿南：引き合いどころじゃない？

布袋：そうです。

佐々木：ある種事故になっちゃった。

阿南：そういうこともあったのですね。

布袋：昔はもっとひどかったのですよ。そしてそれぞれ倒してみたり話してみたり、という世界が。

佐々木：火事になる。まず、ろうそくだし火事になりやすい。

布袋：そうですね。そんな感じだった。

・芸術性について

成田：夜高行燈って芸術的な要素もあるじゃないですか。綺麗で。やっぱりこう、ロウを入れると、さっきも仰ってましたけど、作り手側としてもうちょっと芸術的な方で、こう色を変えたりとか、「芸術的に伸ばしていきたい」と思ったりはしないのですか。

布袋：例えば芸術的にというと？

成田：綺麗に。雑なところを丁寧にやったり、見た目の綺麗さを伸ばしていきたいと思ったりしないのですか。

布袋：それは裏を変えてみたり、細かくするということでしょう。それはチャレンジして皆

さんやっています。ただ、細かすぎると、なんとなく「福野の行燈は。そうじゃない」というふうな、そういうことを思って。やはりちょっと、大雑把な方が、柄が大きい方が良いような。細かい部分もあります。それはみな、美術的、そういう思いを持ってやっています。だから、見えない部分で試しにやってみたりする。裏側。吊り物なんて前からじゃなくて、裏から見てください。色々な絵かいてあったり、字書いてあったりしますし、うちの町内は風神雷神がこう左右に裏に書いてあるので、揺れる度にチラチラっと見られる演出をしてみたり。見えない部分に気持ちを入れてやる。そういう所で試してみたりしますね。あとは本当に大柄なところがいっぱいあるし、形自体ちょっと細かくないとこもあるので。凹凸とか。

佐々木：なんか展示みたいなのとか。

布袋：展示？ミニチュアですか。

佐々木：さっき絵をこう見せていただいて。それ以外にミニチュア作るとか。こういう技術を使って新しい形のものを作るとか。ある種、美術品として展示してみせるとか。あとそういうのをグッズにして販売とかはそういうのはないですか。

布袋：それは観光資源としてですか。

佐々木：なりますよね。そういうことはあまり考えないですか。

布袋：そうですね。みんな忙しいから。たぶんこの祭りで、いっぱい、いっぱいで。1 年の間で仕事の合間にやっている世界ですから。本当に好きな人がこれのミニチュア行燈があったと思いますけど。

佐々木：ミニチュア行燈なんか置いてあって。綺麗だなあと思って。

布袋：あれ結構すごいのですよ。勢ぞろいすると。あとその武者絵も教室を持ってやっています。

・和紙について

竹浪：この和紙って、どこで手に入れたのですか？

布袋：五箇山。五箇山ってご存知ですか？

竹浪：地名だけは。

布袋：ここからちょっと 3、40 分で行けば、はいあります。そこに五箇山和紙の里という実演販売もしている会館もあるので、そこで販売しています。

阿南：そこまで行かないと手に入らない。

布袋：そもそも同じものはあるので。でもちょっとした紙屋さんにも売っていますよ。

竹浪：大きさってどのぐらいですかね。

布袋：なんて言えば。

竹浪：例えば四つ切りの画用紙ぐらい大きさから、あるいはもっと大きい模造紙ぐらいの大きさとか。畳一枚とか。

布袋：これを同じぐらい。1 枚これぐらいですね。それを切って使っています。

竹浪：結構大きいのが。紙も、青森でもいろいろなものを試してみたりするので、あちこちで和紙があると買い求めて、試してみてとか。いろいろ。まあ青森の場合は神社とかお寺に関係している神事、祭礼ではないので、どんどん新しい技法入れて作ってもいいわけです。伝統というのはあくまで明かりの入った動かない燈籠っていうだけが伝統で。もう何を作ってもいいし。ですから面白いところはあるのですけど。ですから、何かね、こういう皆さんの話を聞いて、参考になる部分はどんどん取り入れていこうと思っています。

北海道：沼田夜高あんどん祭り

1　調査概要

日時：2022 年 8 月 21 日　PM：2：00〜3：00
場所：沼田町　観光情報プラザ 2 階　会議室
聞き手：佐々木てる
　　三澤佳奈／松村南／熊地勇樹／成田葵葉／飯田栞音（青森公立大学学生）
　　竹浪比呂央　　津川創（竹浪比呂央ねぶた研究所）
話し手：坂本久和

2　聞き取り内容

・沼田町の町名の由来と祭の起源

佐々木：およそ、44 回目ぐらいになるんですか。今回は。

坂本：そうですね。昭和 50 年、いや 53 年から始まった。違ったかな。ちょっと待ってくださいね。昭和 52 年に。1977 年です。

佐々木：きっかけは、なんでまた。

坂本：きっかけは、この町が富山県の津沢ってところの出身者、沼田喜三郎という人が、ここに入植に入ったのがきっかけで。（その人の名前が）町名になっています。「沼田」というのは、人の名前ですね。北海道、意外とアイヌの言葉の語源だとか、そういうことが多いのですけども、ここはその沼田喜三郎という人の名前からとった町名です。

佐々木：そうなのですか！町名自体が人の名前なのですか。

坂本：一応、町の開拓の祖ということになっています。

佐々木：じゃ、その方がお祭りを？

坂本：その方が入植されて、ずっと経ってからですけども。えーと、その前から獅子舞を秋祭りにやっていたのです。獅子舞を習うのに、（毎回）よそ行って習うのもなんだから、よそに行って習おうかと言って。獅子舞の交流が始まりました。それで獅子を踊るのに、北海道はルーツがない人が多いので、うちの町はちゃんとルーツがはっきりしているので。そこの伝統を引き継ごうということで、獅子舞の交流が始まりました。

　それで、何年か交流しているうちに昭和 52 年に、沼田に交流団の方が行ったときに、当時の沼田の商工会の会長が、今も商工会の会長吉住っていうのですけども、今の方は 2 代目なのです。それで先代の吉住会長が、（交流団の）一行が行ったときに、「うちの町には獅子舞はあるのだけども、もうちょっと変わったお祭りがある」ということで、「それ見てみないか」ということになったのが、この夜高の祭りの始まりです。

　むこうでは、田植え前のお祭り、あの、農家さんの今年の豊穣を祈願して田植え前にする、え「田祭り」です。6 月の初めころ毎年開催していたのですけど。それを見せて

もらって。行燈というのはそれこそ、津軽の方とか青森の方行くと、北海道では見たことのないお祭りで。「ねぶた」というのを何人かですが見たことありますけども、まれだなと。それで、行って見せていただいたものは、そんなにも大きくないけど、なんとなく潰して楽しんでいる。せっかく作ったものをお互い、昨日見ていただいた通り、何かつぶし合いをして楽しんで、今年の豊作を願っているという。そのちょっと特異なお祭りに接して、当時の市長さん、小矢部市の市長さんに、吉住会長が「すごく、いいお祭りだから、その技術を教えてもらえないか」と。獅子舞でも習ったので、行燈のその作る技術を聞いて、「沼田のお祭りにしたいので教えてくれないだろうか」と言ったときに、その当時の市長さんが、「その話はよくわかった」「市も協力して、バックアップするので、北海道一のお祭りにする自信があるか」と念を押されて、当時の会長が「絶対やります」という号令をかけて。「じゃあほんとだね」ということで、

・第 1 回目の運行秘話

坂本 : 見ていただいたら分かると思うのですけど、台車だとかあってお金かかっているのですよ。ケヤキの木で作って、車輪を作ってということで、当時も何十万かしたと思うんですけども。「じゃあ半分はだしてあげるよ」ぐらいの感じでしていただいて。それで、話が急なのですけども、6 月に行ってその年の秋祭りにしたいと。沼田はちょっと 6 月寒いし、お祭りをする時期ではないので、秋祭りに合わせてしたいということになって。当時のここの秋祭りは 9 月 10 日なのですけども、その日までに、6 月に習ってきてから（やろうというのは）すごいと思います。その年に、「やってしまおう」と言ったら、「むこうからもうってもらって、こっちでも準備をして」ということで、その時にものを送ってくれたのです。実は指導者の方が、10 人ちかく来ていただいて、当時は土台から作るのではなくて、一回作ったものの紙のないもの。一応形はあって、今でいうとリサイクル品というか、リユースというか、完全に潰れてないものを送っていただいて。紙を貼って新たに絵を描くっていうことをしたんですけども。絵の描き方が、全然わからないので。「ロウを溶かして筆で描くって、どういうこと？」みたいな。煙だけがあがって、筆は焼けて、ぼそぼそなって描けなくなるとか。そういう細かいノウハウっていうのはまるっきりなかったので、それをほんとに、短時間と言ったら怒られるけども、10 日ほどでそれも教えていただいて。とにかく形にして、「じゃあ当日どうやるの」と。「こんなでっかいものどうやって動かすの」というのも、秋祭りに合わせて当時は、ここの秋祭りは昼間のお祭りなので、行燈だけど昼間出て。動かして。皆さんに見ていただいて。そうやって始めたのが最初の年。だから、行燈だけど電気はつけてない、厳密に言うと。

・夜の運行開始と潰しあいの開始

坂本 : 2 年ぐらいその秋祭りに合わせてやっていました。習ったこと繰り返して。その後、

「行燈なんだからやっぱり夜だよね」ということで、秋祭りの夜に。日にちは変わりないですけど、夜に練って歩くというのが始まりました。ぶつけて壊すっていうのは、当時まだ動かし方も分からないし、向こうの方では亡くなった方もいたりとか、けが人が多数出たりということで。ちょっと引いているというか、「そこまでしてね」と。まだ根付きもしないのに、もし「けが人がでた」とか「死人が出た」という話を聞くと、もう続かなくなるから。「これちょっと我慢だね」ということで、潰し合いはずっと後です。少しほんとに慣れてからようやくって感じですね。

佐々木：潰し合い始めてからどれくらい経つのですか？

坂本：潰し合い始めてからは、正直もう 30 回以上経ちますね。最初の 10 年ちかくは、はっきり言うと潰してしまうとまた作るのに（困る）。作る技術がまだあんまりなかったので、一年に「一個できるかなあ、二つできるかな」だったので。潰しても、一個。「二晩で一個ようやく潰せるかな」ということで。最初の頃は、へさき、こう長いやつ（持ち）上げて、いきなりへさき同士でぶつけて。お互い潰すんじゃなくて。そういうので、「おしくらまんじゅう」みたいなかたちで。ほんとに「最後の最後に一つ潰しましょうか」みたいな話になりました。だけど、最近はだんだんとみんな、作るのも、吊り行燈作る技術も上がってきましたし。だんだん慣れてきたというか。本体を作る技量も上がってきたというか。何年かにいっぺんは、あの、全部まとめて新作で出ようと。

・行燈の制作

佐々木：じゃあ、今の出てきている行燈は、本体の部分は次の年に残して、吊り行燈の部分だけ新しく作るのですね。

坂本：本体を作ると吊り行燈 5 個とか 6 個分の時間がかかるのです。面積も広いですし、どうしても仕事量が増えるので。だから、吊り行燈のペアをたくさん作っておいて、本体を作る時間を確保するとか。とても毎年はできないので。商工会の行燈は、5 年に一度ぐらいの目標ですね。

佐々木：毎年必ず４団体ですか？それはもう変わらない？

坂本：参加している大型は職域というか、ここでいうと職域ですね。JA、商工会、自衛隊、役場というか。昔は、今こども園って言っていますけども、こども園の前に幼稚園、保育園、で、小・中学校あって、高校もあったので。高校というのもありました。それに大型の 4 台。はい。変わりましたね。太鼓の台車だとかって持っているので。実質歩いている数、行燈の数でいうと３倍くらいですね。

佐々木：自衛隊さんとか、JA さんとか、役場さんも、やはり 5 年に 1 回ぐらい本体作り直すのですか。

坂本　：そうですね。それぐらいか、１０年に一度というか。なかなか時間もそうですし、お金も結構かかるのですよ。

佐々木：それで、基本的に吊り行燈だけ毎年。

坂本　：そうです、そうです。

佐々木：８つぐらい作っているのですか。

坂本：毎年作るのが、一年に 5 個潰しているのです。昨日２つ、今日の晩で３個。はい。だから毎年最低５個。

佐々木：どなたが行燈作るのですか？

坂本：行燈作るのは、「どなた」と聞かれると困るのですけど。みんなで作ります。商工会でいうと、木の台を作って、竹を編んで、形にするのが青年会とか役員とか。まあ、男の仕事になっています。電球とかも入れなくちゃいけないので。ここまでは男性だけですね。ほとんどね。そこからの紙貼りだとか、色付けっていうのは、誰これ関係なく。ロウで絵を描く人はちょっと限られます。やっぱり。ちょっと才能もないとだめですし、センスの問題があったりして。絵を描く人は 5〜6 人。多くて 5〜6 人ですね。メインで描いているのが 3 人。うちらの商工会は 3 人。

・吊り行燈の絵柄

佐々木：吊り行燈の絵とかは、毎年決まっているのですか。

坂本：ベースになる柄は、特に毎年これと決まったものではなくて。要するに、昔からの伝統という言葉が出てきますけども、武者絵の題材だったり、花だったり、龍だったり。やはりそういうメインの題材がありますので。それからは外れないようにして。あとは、手抜きって怒られるかもしれませんけど、将棋の駒だとか。六角のちょっと大きめな花一輪みたいな。意外と見栄えはするのだけど、時間がかからないみたいな。あとは「ちょっと絵でごまかそう」みたいなのもありますので。仕事の進み具合によって、いろんなものにしています。

佐々木：龍にしようとか、なににしようとかっていうのは、みんなできめるのですか。

坂本：そうですね。竹を編むのは、基本チームをつくっていますので。3〜4 人の 1 チームにして。「お前たち何作るの」と。それでスケッチ描いてもらって、「じゃあ今年これでやろうか」と。昔は、行燈コンクールといって、吊り行燈のコンクールをしていたことがあります。それは、「今年のお題は花です」とか、「龍です」というお題を出して。「それでイメージして作ってください」と。それで花でも桜があったり、梅があったり、菊があったりとか、いろんな花の種類があると思うんですけども、そういうものを出していました。前夜祭で、始まる前の夜に一杯飲みながら、「今年の新作です」と言って、コンクールをしていたことがありますね。

・制作について

佐々木：吊り行燈の部分は竹ですか。

坂本：まあ竹と中に樽木っていう、5 センチ角ぐらいのもので枠をくって。あとは竹です。

佐々木：本体の方は針金とかですか。

坂本：いや、針金はねぶたと違ってほとんど使わない。

佐々木：使わない。全部竹で。

坂本：そうです。細い丸を作りたいときは針金で作るのですけど。なかなか針金は、紙貼るのにのりしろが細いのですね、針金。「太いかな」と思うけど、貼れる面はほんとに限られていて、紙貼るのが形を作っても大変なので。やっぱり竹のちょっとこうのりしろのあるみたいな。なんとか曲げながら。

佐々木：竹と竹はどうやってつなぐのですか。

坂本：竹と竹は、細い番線というか、花屋さんが使う、縛るものがあるので。細いドリルで穴を開けて結ぶのです。

佐々木：ちなみに、染料や色は。

坂本：染料は、昔は食紅とか使うと教えていただいて。それを使って。それこそ津沢で使っていたのを丸ごと教えていただいて。「これだよ」と。色の話をすると、青森はどうかわからないですけども、色がないのです。それで、昔ながらの顔料というか、西洋的な、合成というのですか。それはあるのかもしれないけども、「昔ながらの顔料に近いようなものください」と言って。「扱ってません」とか、「扱うのやめました」とか。それで、この前驚いたのが、黄色の顔料がなくなって、「欲しいです」と探してもらったら、以前の３倍か４倍の値段のものしかなくて。「そんなにするようになったんだ」という感じですね。

竹浪：その色は、道内で手に入るのですか。

坂本：今のところ、道内で作っているところはほとんどないので、今は塗料屋さんとか、ペンキ屋さんとかに探していただいて、手に入れてます。

竹浪：それは水性のペンキですか。

坂本：水性の粉です。

竹浪：粉、粉ですか。

坂本：粉を溶かして、あの、液体のようにして。

佐々木：雨降ると、、、

坂本：流れます。

佐々木：流れちゃうのですね、やっぱり。

竹浪：雨降ると、大きなシートかなんかかけてやるんですか？

坂本：そうです。今見てもらうと分かると思うのですけど、でっかいビニールかけてます。

佐々木：保管場所は市内のどこですか。

坂本：保管場所とうか、作るところはそれぞれの職場の近いところで。貸していただいているので。役場だと大きな車庫が近くにあるので。農協さんは倉庫たくさん持っているので、倉庫の中だとか。自衛隊さんも体育館みたいなものを持っていたりするので、その中とかで作っています。

・女性の参加

飯田：昨日見たのですけど、女性の方は参加しないのですか。

坂本：今の時代で言うと大変怒られるのですけども、それこそ「伝統」という言葉でごまかさせていただくと。神事というのは、男がするもので、昔から「女は参加するものじゃない」というのがあって。それで「男だけ」というのが伝わってきました。だけども、ここの町ではそんなこと言っていられないので。（以前）津沢では作るのは全員男でした。教えてもらう前の時は、神事なので。「女性を差別する」とかいうのではなくて、「区別する」と言わせてもらうか。女性が手をかけて、もし誰か怪我人が出たら、「女性に手をかけさせたせいだ」とか。女性を（山車に）乗せて事故にあったら、「女性を乗せたせいだ」とか言われるとか。そういうことを言い訳に使っていたとこもありました。

現在、沼田の町では、実は紙を貼るとこから女性が参加しています。津沢では紙貼りから色塗りまで全部女性ですね。沼田でもこの時代に、「女性だ、男性だとか区別していてはお祭りができない」「みんなで楽しくお祭りをしよう」ということで、参加できるところから参加してもらうようになりました。そんな話を何年かしているうちに、本家の方も変わりまして、紙貼りは女性が参加できることになりました。

・運行時の歌

成田：各団体さんが、行燈の上に乗って歌を歌ってのいるですが、あれは、ベースは一緒で、歌の歌詞が団体によって違うのですか。

坂本：歌は、先ほど話した小矢部の市長の、ベースの曲があったのです。それに詩を書いて頂いて、「夜高節」という。それを教えていただきました。それで、今街頭放送でかかっている「ことしゃ豊年、嫁入どきよ」というのは、「豊作になっていい年になりますように」という歌です。それで「たくさん米がとれて、家も繁盛、子孫も繁盛して、ますます栄えますように」という歌になっています。

それがベースで、あと力を出すお祭りになるので、運行するとき用の歌というのもあります。それが、動いているとき聞いていただいたら分かるかもしれませんけども。津沢にも町内会がいっぱいあって、それぞれで引き継いでいる歌があります。それを沼田は、全部引き受けてしまったので、歌詞というか、流れがすごくたくさんあります。中にはちょっと、歌の苦手な人もいるのですけも、順番に「お前は歌だ」とかさせられて。ちょっとなんか、「リズム、ん？」「一回ちょっと飛んだんじゃない」というような人たちがいますが、個性として。個性と言わせてもらうと悪いんのですけども、ちょっと癖のある歌い方をする人もいますので。それはそれで、引き継いでいます。

・赤ベースの行燈

三澤：山車とか吊り行燈を昨日見た時に、赤をすごい基調としている。「赤がベースだな」と思ったのですけど、それは何か理由とがあるのですか。

坂本：このお祭りの最初は、伊勢神宮の御分霊というか、分けて頂いたものなのです。津沢市の中に福野という所があるのですけども、福野の町が「ご分霊を受ける」「授けていただく」ときに、加賀の近く、その境の倶利伽羅峠というのがあって、夜になりますから真っ暗で。江戸時代なので。その神様を迎えに行くので、行燈を持ってお迎えに行ったっていうのが始まりです。だから提灯ですよね。昔で言ったらロウソクの提灯を持って、みんなでお迎えに行ったというのが始まりなので。いうなれば提灯祭りなので、それがだんだん、今度は高さを競うなど、「大きいのがいいんじゃないか」とか。それでしまいには、食紅っていうのが昔からあり、草木染じゃないですけども、そういう和風な染料、藍染めもそうですけどね。そういうのがあったので、それで色を付けるようになって。ロウソクで灯すと、赤っていうのは、夜見たらすごく目立つじゃないですか。昼間は緑も綺麗だし、青も綺麗なのだけども、やっぱり夜になると、赤がベースというのはすごく目立って。競うというか、「背を高くして神様に願いを叶えてもらうには、一番いいんじゃないか」みたいな所から、きているのかもしれません。大体、基本6割ぐらいは赤にしています。色はほんとに模様付けるのに、青も使っていますけど、アクセントとか影とかにしか使いませんので。基本は赤です。ちなみに５色しかありません。

佐々木：５色ですか。

坂本：赤と、赤っぽい橙色というか、トキって言っていますけど。トキ、鳥のトキですよね。赤、トキ色、黄色、緑、青。この５色しか使っていませんので。「なるべく混ぜないでね」ということにしています。いろんな色も合わせればできるのですけど、それをしてしまうと、昼間綺麗なのでが、夜ぼやけてしまうので。「なるべく５色そのまま使いましょう」という。

・行燈を壊すこと

松村：毎年毎年、吊り行燈を壊されて、作り直していると思うのですけど。壊されるときの心境ってお伺いしてもいいですか。

坂本：皆さんによく聞かれるのですけども。「せっかく作ったのに壊して悲しくないのですか」とか、「辛くないですか」と聞かれるのですけど。綺麗に壊される、再生できないぐらい壊された方がすっきりして気持ちいいですね。それはこのお祭りのルーツみたいなもので、壊されて違うもので復活する。日本の田祭りの原点だと思うのですけども。「自然にいじめられてもまた立ち上がる」というようなことがルーツだと思うので。しっかり壊されて、新しいのを付ける。それで「もう一回できるぞ」というような雰囲気になって。全然悲しいとか、辛いとかは思わないですけど、壊され方が下手な時は、ちょっとムカッときます。せっかく一生懸命作ったのに、先っぽだけペシャっと壊されたら、なんかねイライラしますね。「壊すならもうちょっときっちり壊してほしいな」という気になるので。なんぼ壊されても腹は立ちませんし、綺麗に壊された方がうれしい気持ちになります。

・ぶつけ合い

熊地：昨日ぶつけ合い見た時に、乗っている方が、相手の方を煽っている。マイクパフォーマンスとかあったのですが、そういうのは最初からやっていたのですか。

坂本：最初の頃はそんなことしていませんでした。ほんとに、危ないというのと、危険だというのが分かっていますので。お互い、そんなに相手を挑発するようなこともしていませんでした。実はぶつけ合いして、「みんな仲が悪いんですか」みたいに言われるのですけど。作っている仲間はみんな仲がいいです。それで、台の上に乗っている若頭とか、若頭同士でパフォーマンスというか。今って、結構見に来ていただく方が増えたので、その方々向けっていうと言葉悪いですけども。楽しく見ていただくのに、ダラダラしていたら見栄えも悪いですので。参加していただけるような、「行くぞ行くぞ」と言いながら、ちょっと皆さんの期待に応えようというのもありますし。「始まるよ」という合図にしたりとか。結構そのパフォーマンスというか、乗っていて危ないのですけども、何とかやっています。

ときたま落ちる人もいるのですよ。どういうわけか。あの高さは、見ているとたいしたことないのですよ。「ちょっと高いとこにいるな」という感じなんですけども。ただ、そこから落ちる時は予期してないので。猫もそうですけど、人間って着地するときは、膝がこう曲げて、ショックを吸収するのですけども。ああいうとこから、パッと落とされると、踵から着地しちゃうのです。それで、ちょっと痛い目に合う人が多いです。つま先から上手に降りて、クッション、猫のよう「ひゅっ」と力を逃がせればいいんですけど。なかなか、気が張っている時に不意打ちを食らうと痛いですね。私も何回か落ちたことがあります。

佐々木：そうなのですか！

坂本：こう見えて最初の頃から登っていたというか。ずっと体重変わらないので。重いやつを乗せると動かなくなるから、「体重の軽いやつは上にあがれ」ということで。そんなこともさせられました。

・行燈の運行者

佐々木：あれを実際に動かすとか、乗る人の年齢は大体決まっているのですか。

坂本：年齢は決まってないです。

佐々木：決まってないのですか。なんか青年が多い気がしました。あと男性だけですよね。基本的に。

坂本：基本的に台につくのは、男性だけにしています。

佐々木：やっぱりそうなのですね。

坂本：はい。別に女性を差別するというか、区別するのではないのですけど。結構危険なのです。それで参加してもらってもいいのですけども、どうしても、手とか顔とか傷を負

ってもまずいです。あと密着するのです。見ていただくと分かるように。後ろ、後ろとか、押すときって。それで、女性でも参加したい人はいるのだけど。（男性でも、女性と）ぐちゃぐちゃになって、一丸となって押すのが嫌いな人もいたり、色々いるので。後で怒られても（問題なので）、最初から「ごめんなさい」ということで行燈の本体には参加していただいていません。その代わり、踊りだとか、太鼓だとか、お囃子だとか、女性が参加しやすく、距離をとってできるところには「参加してください」と。

佐々木：では、必ずしも神事だから女性はだめというわけではないのですね。

坂本：「神事だから、女性は参加させていません」ということではなくて。危険が伴うので、そういうところは遠慮いただいているということです。

佐々木：もしかしたら、いつか上に乗る女性が出てくるかもしれないですね。

坂本：そうですね。昔は行燈にも触らせないというのがあったみたいで。今は、はしごかけて写真撮るのに、「女性でも、どなたでも一緒に撮ってください」とか。全然その辺区別はしていません。子どもだろうと、「どうぞどうぞ」という。その辺が北海道流かもしれません。

・行燈から出るスモークの由来

佐々木：スモークも気になるのですけど。

坂本：あれはね、環境問題にうるさい人からすると怒られますけども、実は炭酸ガスです。ガスボンベなので。

佐々木：昔からですか？

坂本：最初は花火や煙幕とかも使っていましたけど。単なる炭酸ガスが、一番いいのですけども。今、「二酸化炭素を削減しましょう」という中で、かたちになっているとはいえ、そこを噴出するわけですから。ちょっとね、うるさい人には嫌な問題かもしれないです。

佐々木：富山の方でもスモーク出すのですか。ここだけですか。

坂本：向こうは伝統がきつかったせいか、実は北海道の方が最初なのです。

佐々木：そうなのですか。

坂本：意外と伝統を引き継いだはずなのに、加工するのは好きなのですね、北海道。「もうちょっと良くならない」とか。「せっかく龍を作ったんだから、口から火を噴いたらどうだ」とか。「煙出したら面白いんじゃない」だとかいうことで、最初のうちは煙を出していました。「黒くしたり、火噴いたらどうだ」。「火はちょっとね、危ないからやめようや」ということになって。実は沼田の煙の吹き始めは、（北海道）滝川（市）で「しぶき祭り（あんどん滝川しぶき祭）」というお祭りがあって、そこでちょっと、夜やっていたのですけども。そこでなんか「プシューッと勢いよく煙噴いていたよ」。「何を噴いてたの」と言ったら、「炭酸ガス」。「あ、それが使えるのか」ということで、炭酸ガスになりました。炭酸ガスは、生ビールの時使ったり、色々しますよね。その炭酸ガスです。

・行燈の制作について

津川：行燈の制作についてなのですけど。細かい模様を描くロウ書きとかは限られた人しかできないとおっしゃっていたのですけど。それを行う人の年代をまず知りたいのと、あと、後継者の問題とかは生じていないのかということについて、ちょっと教えていただきたいです。

坂本：はい。一応みんなに紙貼りをしてもらいます。それから、ロウを塗ったところに色を入れてもらいます。それは必修です。一番ベースですから。それで、絵を描く人が大事なので、一応それぞれ描いてもらいます。描いてもらいますというか、挑戦してもらいます。だけど、やっぱり向き不向きがあって、「線を描いてください」というと、波打ったように太くなったり細くなったりだとか。一筆で描かないとだめなんですけども、油絵のようにじっくり、すっていると、途中で温度が下がってだめになるとか。そういうことで何回か挑戦というか、教えてみるのですけども。やはり、苦手な人はやっぱりだめなので。「次に挑戦しようね」ということで。諦めてはいないです。もっぱら「紙貼りと色塗りでもいいかな」みたいなことで。

以前は男の人だけでした。最初はね。それで、沼田の男の人が（山車）作るときと一緒で、男が男に教えて描いていたのですが。「絵を描くのって男だけでも別にこだわらなくてもいいね」となって。「女性でも絵を描くセンスがあったり、デザインしたり、色使い上手な人いるんだから、女の人にも描いてもらおう」ということで。紙を貼りに来ていた、お祭り好きの女性に「描いてみない」「色塗るばっかりじゃなくて、好きなちょっと絵を描いたらどうですか」ということで、何人かに、描いていただきました。そしたら中にはセンスある人がいて。たいして苦労しなくても見よう、見まねで上手に描いてくれる人が出てきたり、とかいうのがあったので。今は商工会の行燈では、絵を描く人は女性一人。この人は大変上手です。

・一筆がき

坂本：あともう一人。デザインの学校かどこか出た男性。もう40歳ぐらいですけども。その人はフリーハンドで描きます。私たちは、昔はロウで絵を描きましたけども、まず鉛筆で下絵を「割を当てる」というか。「このぐらいなところで、このぐらい」なもので。鉛筆で下絵をしてから描くのですけど。（その男性は）何にもみないで。今の時代ですから題材はスマホに入っている。それで、自分で加工した「こんな絵を描こう」というのをスマホに入れていて。「ふーん」と見ていたら、なんも鉛筆も入れないでいきなりロウで描き始めました。それを見ると、今度はあんまりすごい子が出てきたものだから、みんなちょっと尻込みするのですよね。「え！あんな事はできないよ！」ということで。それじゃあちょっと困るので。今ちょっと、それやっぱ若い子に、小さい募集技者だとか、太鼓の台座とか小さいのがあるので。それを描いてもらって。今その子を一人、新たに

育てています。今正直、4 人ぐらいですね。描いているいのは。あとは「雑用」と言ったら怒られるけども、ふちを切ったり、絵を描かない、ロウの前の仕事があるので。直線で角をロウでつぶしていくような仕事はしてもらっています。正直言うと、「どこまでできるのかなあ」というのはあるのですけど。いかんせんその絵を描く人を育てないといけないので。苦労していますけど、爆発的には増えませんね。やっぱり。残念ですけど。

・後継者など

佐々木：行燈をみんなで作っているのであれば、その中から色々描ける子どもとか出てきたりはしないのですか。

坂本：ちょっと前話を聞いたのは、JA さんの女性職員がすごく上手な人がいて、半分以上描いているとか。自衛隊は女の人はいるのだけど、ほとんどいないので男性ばかりです。役場も上手な男の人が多いので、女の人はあんまり絵を描いてないみたいですけど、ちょっとずつ増えています。だから私らから見ると、やっぱり絵を描くっていうのは、センスだと思うので。「女性の方が上手なこともあるのかな」と思うのですけど。なかなか作り始めると、作業時間に拘束されるので。女の人も家庭を持っていたり、子どもがいたりすると、なかなか作る時間をつくっていただくのが大変で。ほんとはもっと参加できる女性の方は、いっぱいいるのですけども。「これ描いてね」とお願いしちゃうと、すごいプレッシャーになるので。ちょっとジレンマですよね。

・制作期間

佐々木：大体３か月ぐらいですか。

坂本：そうですね。6 月の始めぐらいからです。津沢の方で「お祭りをやったよ」と話を聞くと、今年は「沼田でもやらなくちゃ」というのを聞いて。6 月の始めぐらいから作業にかかりました。

竹浪：制作の時間というのは、毎日平日は夜だけなのですか。

坂本：一応商工会は自営業というか、社長さんだったり。なので、昼間、本業があるのですよ。それで、「夜なら時間作って」ということで。基本ほんとに、ぶっちゃけていうと、午後の 8 時から 10 時。一日 2 時間が目安です。

竹浪：倉庫に集まってですか。

坂本：そうです。それで 6 月の頃は土、日だけ休み。ですから、なんとか 2 時間ずつぐらい。

・制作参加者について

竹浪：他の市町村とかから、例えば、「沼田の商工会さんとは全く関係ないのだけど、絵を描いたり、ものを作ったりするのが好きだから、制作に参加させてくれ」とか、そうい

う方っていらっしゃいますか。

坂本：商工会は好きな方というか、参加できる方は拒みません。昔、どこだったか、深川だったか、「絵を描くのが好きなんです」という人がいて。「じゃあどうぞ」と描いていただいたこともあります。だから別に町民に限定しているわけじゃないので。「お祭りに参加してみたい」とか、「色を塗ってみたい」という人がいると来ています。今でも深川から来ている人と、遠くは品川とかから来ていますし。

個人的に好きな子がいまして。その子は身体が不自由で。車椅子で、介助してもらわないと、どこにも行けないのですけど。その子がテレビを見たのが始まりなのかどうかわからないのですけど。もう 10 年以上、お祭りを好きになっていただいて。色を塗るときと、当日に来ていただいています。一人で動けないので、泊りがけで来るのです。夜の祭りだから、介助する人も大変なのですけど。色を塗って、感激して。お祭りに、なおかつ車椅子で行燈の後ろを歩いていただいたこともあって。何かがあるから「参加できないよ」じゃなくて。「気に入っていただいた人は一緒にやりましょう」とずっと思っていますので。そんな方もいらっしゃいます。だけど、引き継いだのなら「勝手にコピーはだめ」ということで。よその人に、丸ごと教えたり。見ていただければ分かるのですけど、「伝統を引き継いだ」というのがあるので。それこそ「本家の許可を無しに、よくある、真似たお祭りを次から次へと広めてはいけませんよ」ということは言われました。

・記録を残す

竹浪：毎年新たに吊り行燈、新しくしたものは全部写真に撮って記録を残しているのですか。

坂本：最近は撮ってもらっています。昔はもういい加減だったので、行き当たりばったりでした。最近はスマホが良くなったとか、デジカメが良くなったとかで、パシャパシャと撮って見られるようになったので。昔はあの、写真にしておいたのですけど。アルバムが行方不明だとか、「あれ撮ったはずなのにどうしてないの」という。

竹浪：そういうのは、写真撮ってデザイン誌みたいにしてとっておくと、この先いいですよね。

坂本：そうなのです。

竹浪：新しいものを作るにしても、それを参考にするとか、それを少し変えるとか。この時のこの色使いがいいねとか。

坂本：そうですね。だから過去を参考にしながら、ちょっとアレンジしたものというのを作っていますね。

・匠の会

佐々木：「匠の会」というお話を聞いたのですけども、「匠の会」っていうのはどういう会ですか。

坂本：「匠の会」というのは、これも吉住会長が、「それぞれの行燈（制作）で上手な人いるでしょ」「絵を描くのが上手だったり、竹を組むのが上手だったり」と。その人たちを、「行燈づくりの匠だよね」「技術者の伝統を引き継いでもらう人を育ててください」と言い出したので。俗にいう「匠」というものをつくって。（伝統を）継承してもらう位置付にしようということで、「匠の会」っていうのをつくりました。最初の頃はなかなかいなかったのですけども、匠の会に入れるような人を、「それぞれの行燈で育ててください」ということをお願いして、「匠の会」というのができました。今は 14～15 人ですね。ここ最近は増えていませんので。なんで増えていないのかは、ちょっと私もよく分かっていませんけど。「匠の会」。匠と認定するのは、実行委員会の上に保存会っていうのがあって。一応保存を目的にしてつくられた会なので。「伝統を引き継げるように匠を育ててくださいね」ということで、「匠の会」と言われています。

佐々木：どなたかがこの人を匠に推薦するっていうかたちで、判定するのですか。それとも保存会の人が「あの人そろそろ匠かな」と推薦するのですか。

坂本；それもありますけど。以前、「推薦してください」ということをしたのです。そしたら、「（その人）推薦しなくちゃいけないの」ということになって。無理にこの人「匠に推薦してください！どうですか！」みたいなことをお願いすると、「どなたかいませんかね、じゃあうち１人出しますか」みたいになると価値がなくなるということで。最近は増えていません。

佐々木：年齢は、皆さん大体おいくつくらいですか。

坂本：幅ありますねえ。匠１号はもう８０過ぎちゃいました。一番若い子で、若い匠で 50 歳くらいですかね。

第三部

2022 年ねぶた運行団体紹介

公開講座・研究報告資料

青森菱友会

～挑戦をやめない竹浪比呂央　水の表現に注目！！～

【2022 年の見どころ】

今年の題材は「龍王」。制作は竹浪比呂央氏である。浅虫に祀られている八大龍王がテーマとなっている。竹浪比呂央氏と言えば今までになかった技法を取り入れたねぶたである。昨年度の「雪の瓦罐寺」ではわざとクシャっとした特殊な和紙を用いて雪を表現したり、2019 年にねぶた大賞を受賞した「紀朝雄の一首　千方を誅す」では和歌を書いた紙をなびいているように見せたりと、斬新な技法を取り入れながら圧巻のねぶたを制作している。今年の題材は水に関する神「龍王」ということで灘蛇龍王と沙羯羅龍王が操る清水をどのように表現するのか、ぜひともご覧あれ！

【歴史】

青森菱友会は平成 2 年に初陣、以降毎年出陣している。令和元年は出陣 30 回目の節目の年であった。令和 2 年度、3 年度は青森ねぶた祭がやむなく中止となってしまったため、今年は出陣 31 回目となる。本団体は平成 30 年に「岩木川　龍王と武田定清」でねぶた大賞を受賞し“平成最後のねぶた大賞”を受賞した団体となった。また、平成 30 年に続き、令和元年にも「紀朝雄の一首　千方を誅す」でねぶた大賞を受賞し、“令和最初のねぶた大賞”を受賞した団体となった。その他「今別の伝説より 大泊の鬼」（平成 12 年）「小川原湖伝説 道忠幻生」（平成 17 年）の過去 4 度ねぶた大賞を受賞している。平成 2 年からいずれも竹浪比呂央氏が制作を担当している。

【運行】

囃子は「青森菱友会囃子方」が行う。以前は１００名が在籍しており、60～70 名が社員で残りの 40 名程は本団体で演奏したいという一般の方であった。しかし、新型コロナウイルスの影響で以前に比べて人数が減ってしまっている。囃子方の募集は関連グループの希望者のみ受け付けている。囃子の大きな特徴は音響機材を一切使用しない「生音」へのこだわりだ。笛の旋律と太鼓と手振鉦の迫力をぜひ体感していただきたい。
新型コロナウイルスによる制限で跳人は少なくなってしまうが、ねぶた祭が 2 年ぶりに再開するためしっかり準備してみんなにいいねぶたをお披露目したい気持ちだという。

【制作】

平成 2 年の初陣から制作者は竹浪比呂央氏である。題材について、菱友会から竹浪比呂央氏に「地域に密着した題材」をお願いしているが、そのほかにスポンサーとしてお願いしていることは特にない。平成 6 年～30 年までは青森県各地域の伝説や伝承を題材とした

ねぶたであった。30 年目の出陣となる令和元年は青森県の題材から離れた特別な年であった。今年度からはまた地域に密着した題材でねぶた制作が行われる。

文責　七海香穂

青森市民ねぶた実行委員会

～節目の年を迎え、思いを込めての出陣～

【2022 年の見どころ】

2022 年の青森市民ねぶた実行委員会は、例年に引き続き北村麻子氏が制作を担当しており、女性ならではの繊細で鮮やかな色づかいが特徴的な作品となっている。今年の題材は「琉球開闢神話」であり、今年本土復帰から 50 周年を迎える沖縄に古くから伝わる、イザナギ・イザナミとは異なるもうひとつの国生みの伝説を取り上げている。第二次世界大戦時日本で唯一の地上戦が繰り広げられ激戦地となった沖縄の歴史を今一度振り返り、世界秩序が乱されている昨今、同じ過ちを繰り返してはならないという北村麻子氏の願いが題材に込められている。青森市民ねぶた実行委員会は団体として今年ねぶたを出陣させることが出来れば、記念すべき出陣 20 回目という記念の年であり、また北村麻子氏も 2012 年初陣から 10 年目といういくつもの節目が重なる年でもあるため、例年にも増して気合いが入っている。

【歴史】

青森市民ねぶた実行委員会は企業団体ではなく、様々な仕事をしているねぶた好きな人が集まってできた市民団体である。2002 年からねぶたの運行を開始した。そのきっかけは地元の景気が低迷したことだという。それによりねぶたの台数が減り、運行を休止している団体もいくつかあったため、新たに団体を立ち上げてねぶたを出し、祭りを盛り上げていくことになった。予算は企業からの協賛金で賄っており、一般市民からの寄付は受け取っていない。今年は、例年に引き続き「ダイドードリンコ株式会社」、「クラブツーリズム株式会社」、「株式会社近畿日本ツーリスト」に加え、「株式会社星野リゾート」、「株式会社ロッテ」、「オリックス株式会社」、「INFLUX INC」などがスポンサーとして協賛金に協力している。

【運行】

青森市民ねぶたは 2017 年から跳人の動員に力を入れていた。スポンサーの関係者や青森市民の参加募集をホームページで行い、参加者には浴衣と花笠を無料で貸し出すなどした。浴衣は 700 着、花笠は 300 個も用意していた。ただし、足袋と草履は自分で用意する必要

がある。その結果、多いときで 1 日 500～600 人参加するようになったという。また浴衣は弘前で開催されているファッション甲子園でデザインを募集し、応募された中から採用した。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあるため、人数制限が設けられると考えられる。今年は、星野リゾート青森屋とのコラボレーションとして、“温泉に入ったねぶた”をモチーフとした前ねぶたを、株式会社ロッテは自社製品である“クーリッシュ”の前ねぶたを北村麻子氏に制作を依頼し、運行することを予定している。

【制作】

青森市民ねぶた実行委員会ではねぶたの題材やデザインなど全てをねぶた師の北村麻子氏に一任している。団体側からのお願いなどは一切なく、原画に関しても北村麻子氏のものをそのまま通している。

【囃子】

企業団体ではなくねぶた好きが集まり結成した囃子部「青森市民ねぶた囃子隊」という独自の部隊があり、現在の指導役の教えに忠実に従った演奏が主体となっている。隊員数は 150 人くらい。そのうち毎日参加する人は半数くらいだという。週に 3 回ほど、年間を通して練習している。祭り本番に使用する笛用の音響マイク前には演奏が上手い人以外の人も立たせ、全員が技術向上できるように努めているのが特徴である。

文責：中谷帝虎

日本通運ねぶた実行委員会

～最古参の一新！進化し続ける新たな姿～

【2022 年の見どころ】

今年の題材は林広海氏の「土岐元貞　猪鼻山の勇名」である。室町時代の武将、蒲生貞秀が甲斐の国の猪鼻山に陣を張った時の出来事。身の丈が約 6 メートルもある仁王像と阿弥陀如来の化け物が相撲を挑んできたのである。元貞がこれを投げ飛ばしたところ、阿弥陀仏の腹の中から骸骨がぞろぞろ出てきた。その後、蝶に変じ元貞にまとわりついて視界を奪ったが、元貞はそれを難なく逃れた様子が表現されている。また、前ねぶたはボートレース協会から出す予定である。

日本通運では、今年から会社のマークが変更された。それに伴い、ねぶたの看板、半纏、提灯全てが変わる。そのため、運行団体として最古参でありながら、新規参入するという新鮮さを持ち合わせている。

【運行団体の歴史】

日本通運ねぶた実行委員会は、昭和22年から連続して祭りに出陣しており、2016年には70周年を迎えた最も古い歴史を持つ団体である。祭りに参加することとなったきっかけの一つは、祭りに参加したいという従業員の声である。その始まりが今まで脈々と続き、70年以上の歴史を築き上げた。ねぶた祭を広告媒体と捉えるのではなく、地域貢献の一環としてこれまで参加してきた。

【ねぶた運行】

跳人は多い時には300人程度で、団体の跳人ではなく自由参加型の跳人で、観光客でも自由に跳ねることができる。みんなで楽しく跳ねようという雰囲気を大切にしている。曳き手は、基本的に社員が担当しているが、アルバイトも雇っている。

今年は、3～7日の5日間の出陣を予定している。跳人は関係者のみで、一般の募集はない。囃子は例年通りの人数で行う予定である

【ねぶた制作】

日本通運ねぶた実行委員会のねぶたは、2016年には第5代目名人である千葉作龍氏が制作した。それ以前では、北川金三郎、北川啓三、佐藤伝蔵ら歴代の名人が制作してきた。実行委員会の方から何かしらのテーマで制作を依頼するのではなく、ねぶた師に全面的に任せている。歴史ある日本通運のねぶたを制作するということで、制作側も緊張感と誇りをもって取り組んでいるそうだ。

【囃子】

元々は、青森郷土芸能保存会という名前で活動していた。その後、ねぶた囃子一つに活動を絞り、現在の青森郷土芸能ねぶた囃子保存会に改名された。鉦、太鼓、笛の3つができて一人前とされ、担当の楽器以外も演奏することが当たり前とされている。運行中は、昔ながらのファンも含め、見ている人がかっこいいと思えるように魅せる囃子を心がけている。

文責：川口華流

県庁ねぶた実行委員会

～2年ぶりの夏、全団体の思いを背負って～

【2022年の見どころ】

迫力満点の面と、散りばめられる鮮やかな紅葉。2022 年、県庁ねぶた実行委員会から出

陣するのは「遮那王(しゃなおう)と鞍馬山僧正坊(くらまやまそうじょうぼう)」だ。源義朝(みなもとのよしとも)の九男・牛若丸(うしわかまる)は、平治の乱で父を亡くして鞍馬寺(くらまでら)に預けられ、太陽を意味する「遮那王」と称する。僧侶を目指し修行する遮那王だが、父が平氏に殺されたことを知り、打倒平氏の志に燃える。

ねぶたは、遮那王が仇討ちのために、大天狗である鞍馬山僧正坊から剣術を教わる場面を表現したもの。きりりとした遮那王の表情は、強い覚悟に溢れている。「遮那王と鞍馬山僧正坊」は、もともと2020年に青森ねぶた祭に出陣予定であったが、2020年、2021年と本祭が中止となり、表に出ぬまま眠り続けていた。2022 年、念願のお披露目を迎える。遮那王の熱い思いが、2年のときを経て青森の夜に燃え上がる。面の表情や、豊かな色彩に注目したい。

【運行について】

運行統制は、県庁職員が中心となって行う。スタッフが一体となって、安全に最大限配慮しながら運行を支えている。囃子は、「県庁ねぶた実行委員会囃子方」による。ベースは正調囃子ではあるが独自のアレンジを加えて非常に手数が多いのが特徴である。例年夕方、埠頭裏で練習している。

県庁は、地方公共団体。自治体という立場から、伝統ある祭りを盛り上げたいとの思いがある。新型コロナウイルス感染症の影響で例年通りの形で運行できない不安はあるが、出陣できない団体の思いも背負って運行したい。

【制作について】

ねぶた制作は、我生会に依頼。我生会は、第4代ねぶた名人・鹿内一生氏の弟子や孫弟子にあたる制作者で構成されている。現在の制作者は、孫弟子にあたる大白我鴻氏だ。鉛筆書きの原画を県庁で確認しているが、題材決めや制作は、大白氏に全て任せている。

文責：佐々木世奈

東北電力ねぶた愛好会

～地域社会に「寄り、添い」、ねぶたと未来を照らす～

【2022年の見どころ】

今年の題材は「田村麿　悪鬼高丸を滅す」。制作者は京野和鴻氏である。ねぶたの起源は諸説あるが、「疫病退散の防災行事」ともいわれていて、この「新型コロナウイルス」という悪鬼が一日も早く消滅して、安寧な世の中が再び訪れることを願っている。題材は中止にな

ってしまった昨年のものを持ち越している。昨年完成していた送りの一部は東北電力青森支店構内、青森空港到着ロビーに展示しているため、送りは新しく制作される。

前ねぶたは毎年キャラクターものを制作している。東北電力にもまかぷぅというキャラクターがいるが、それに限らず子供たちに人気のキャラクターを採用している。今年は「かいじゅうステップ」である。制作はねぶたと同じく我生会が行う。

【歴史】

東北電力ねぶた愛好会は昭和 23 年から運行を開始した。経営理念が「地域繁栄への奉仕」ということもあり、地域との共栄を目的に始めた。現在のコーポレートスローガンも「より、そう、ちから。」であり、地域に寄り添い，地域の伝統文化の継承と地域の盛り上げに貢献するため運行を続けている。東北電力ねぶたはオイルショックの影響を受け、昭和 48 年に出陣を休止した。しかし青森市内に在住するねぶたを愛する有志からの復活を望む声が多くあり、労働組合が中心となって東北電力ねぶた愛好会を立ち上げ、昭和 59 年に運行を再開した。運営資金は愛好会員からの会費を中心に、関連企業や取引先からの協賛金により賄っている。現在も労働組合と会社が協力してねぶた運行を行っている。

【運行】

今年は 8 月 2、4、5、6 日に出陣する。東北電力ねぶた愛好会には 500 数名が所属しており、その中の実行委員会が当日の運行を取り仕切っている。跳人は多くて 1 日 100 人ほど参加し、愛好会からは 1 日 20 人ほどが参加しているという。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症による制限があるため、だいぶ少なくなるだろう。また東北電力ねぶた愛好会では花笠の着用は必須で、跳人として参加する人には貸し出しを行っている。囃子は社員が中心となった電囃会という部隊を持っており、その会員は 50 人ほどである。その中には勤務地が県外の人もおり、休日を利用して青森に囃子の練習に来る人もいるのだという。また、東北電力ねぶた愛好会には曳行部という曳き手の部隊がある。部員は 20 人くらいで、東北各地に散っているので 1 日 5 人くらいが代わるがわる参加しているという。

【制作】

ねぶたの制作は昭和 59 年の復活出陣以降、我生会に依頼している。現在のねぶた師は京野和鴻氏である。東北電力ねぶた愛好会は昔ながらのねぶたにこだわっている。現在のねぶたは鮮やかな色づかいのねぶたが多いが、東北電力ねぶた愛好会は淡い色づかいで一体もののねぶたを作っている。我生会独特の淡い色づかいとかすれのある書き割り（渇筆）で表現される荒々しさ、手足の力強さが特徴である。

題材について、東北電力は東北 6 県と新潟県が管轄であり、テーマが「より、そう、ちから」であるため、東北にゆかりのあるもの、青森にゆかりのあるものをお願いしている。

【東北電力ねぶた愛好会囃子方　電囃会でんそうかい】

名前の由来は「東北電力の囃子の会」ということからきている。結成当初の先輩方の思いや囃子のこだわりを大切に引き継ぎ、さらに後継へと伝えていくことに重きを置いて活動している。また囃子は「縁の下の力持ち」という理念のもと、ねぶた本体や跳人を盛り上げるべく音を奏で、影ながら東北電力ねぶた愛好会を支えている。

文責　七海香穂

ヤマト運輸ねぶた実行委員会

～常に新しいものに挑戦し続ける、名人北村隆：あぶく！！～

【2022 年のねぶた】

2022 年のヤマト運輸のねぶたは北村隆の「張順と李逵　水中の格闘」。見どころはなんといっても、口から出るあぶくの表現である。第 6 代名人の北村隆は、これまでないねぶたに挑戦し続けている。2018 年のヤマト運輸「白浪五人男」では、ねぶた 3 体程度が普通にもかかわらず、ねぶた 5 体をのせ、迫力はそのままを維持するという荒業をこなした。今回の「あぶく」は新しい挑戦として、灯りが入った時が見ものである。もちろん名人らしく、しっかりと墨の線も太く、ねぶた自体に迫力がある。第一線で活躍し続ける北村名人のねぶた注目してほしい。

【歴史】

全国の運送会社の代表で組織している会合が偶然ねぶたの時期に青森で開催され、その時に日通のねぶたが参加していることにヤマト運輸関係者が刺激を受けた。特に宅急便の仕組みを作ったヤマト運輸 2 代目社長が、ねぶた祭りを気に入り当時の担当者が出陣に向けて準備することになった。出陣までに 2～3 年かかっており、観光ねぶたとして出陣していた「大和山（青森県教区連合会）」の枠が空いたところにヤマトが推薦されて運行することとなった。当時担当していた社員がねぶた師の穐元鴻生氏と顔見知りで、穐元氏がデビューするタイミングに依頼することができた。また、穐元氏の一番弟子である大白我鴻氏に意思を継いでいただき 3 年ほど依頼した。その後北村隆氏に依頼し現在に至る。毎年、青森の主管支店長が団体責任者、労働組合の青森の委員長が運行責任者として参加している。実行委員は青森市内の集配しているドライバーで、日中が忙しい。メンバーはヤマトの社員だけで構成しているため、仕事をしながら稼働の合間をみて会議を行っている。

【運行】

実行委員 30 人、ヤマトの主管支店社員 20 人、アルバイト 80 人が中心で運行している。今年はそれらにさらにスタッフとして 40 人が増援されている。また統制班も別にいて、跳人はヤマトの関係者だけで 100〜150 人もいる。跳人と一緒に、「クロネコジャンプ」と呼ばれたものや、「クロネコヤマトの宅急便」というフレーズの掛け声を 20 年近くやってきた。しかし、ここ何年かは企業 PR や企業イメージを連想させるため、一切使っていない。リズムは似ているが、「祭りだよ」「日本の火祭り、ラッセラ、ラッセラ」と掛け声を変えている。囃子会である「夏響会」の運営の助成金はヤマト運輸から出しているため、会費を取らなくても最低限の運営はできる。最初は社員と取扱店だけで構成されていたが、今では一般の参加者と一緒に行っていて、会長もヤマトの社員ではない。会員は大人子ども合わせて約 100 人。ヤマト運輸の本社公認の祭りは青森の「ねぶた」と四国の「阿波踊り」のみである。予算も決算も会社の経理と同じで、経費として申請するので無駄遣いはしないようにしている。「絆灯の会」は、ヤマトの社員の有志が集まる親睦会のこと。

【制作】

ねぶたはねぶた師の一番作りたいものを作ってもらっている。4 年前から LED が全体の 7〜8 割を占めるため、700〜800 個は LED を使用している。色や明かりの表現によっては、白熱球と蛍光灯を使い分け、白熱球の代わりに省エネボールを組み合わせて使用している。基本的には、ねぶた祭りが終われば壊し、また新しいねぶたで表現してもらう。一番の希望は一年間ご褒美で見せることができるワラッセに入ることで、そうすれば、出張で来た県外の方たちにもヤマトのねぶたを見てもらうことができるからである。結団式に当たる「三位之会」でねぶた絵図のお披露目をする。

【囃子】

ヤマト運輸ねぶた実行委員会の囃子はヤマト囃子方夏響会が担当しており、会の発足から今年で 24 年目となる。夏響会の名前には、囃子が夏の空に響き笑顔で奏でるという意味が込められている。女性も男性に負けない迫力で演奏をするのが特徴的である。賞を狙うよりも最後まで笑顔で楽しく演奏できればよいと考えている。進行囃子、戻り囃子は細かい部分に関してこだわりを持っており、特に昔から受け継いできた、ころばし太鼓は非常に大切にしている。

文責：佐々木てる

NTT グループねぶた

～制作時間は 2 年！最も手の込んだ作品に注目！ ～

【2022 年の見どころ】

NTT グループねぶたの今年の題材は「素戔嗚尊八岐大蛇退治」、制作者は北村春一氏である。NTT グループねぶたは、2019 年に賞を受賞し、2020 年はコロナの影響により中止され、ワラッセに 2 年間展示された。2021 年は出陣予定だったものの、北村春一氏は多くの人に見てもらいたいという要望で、代替イベントには参加せず、2022 年に出陣を控えた。そのため、今年は去年の制作途中のままであり、時間がかけられているため、手の込んだ作品になっている。また、前ねぶたは NTT ダイナミックグループと、ドコモダケにかわるドコモのポインコの 2 台である。

【運行団体の歴史】

NTT グループねぶたは通算して 62 回目の参加となる団体である。発足当初は「NTT グループねぶた」ではなく、「電気通信省」や「電気共済会」という名称だった。名称が電気通信省だったとき、部長から「職員と一緒に何か楽しくやれるものはないか」という話があり、職員の士気高揚と、青森市の祭りに貢献するためにねぶたを出陣したのが始まりだ。グループ関連会社である NTT ドコモ、NTT ファシリティーズ、NTT データスマートソーシングなどが協力してねぶたを出している。

【運行について】

近年北村春一氏のねぶたが制作者賞に入賞している事から、団体として賞を取る事に前向きになっている。だからこそ、今年は 4 年前に受賞した知事賞に続く、大賞を狙いに行く勢いである。

【制作者について】

過去の制作者は福井祥司氏、内山龍星氏で、現在は北村春一氏が担当している。若手の制作者育成の観点から、次代を担う人材を探していたところ、北村蓮明氏の息子である北村春一氏と話をする機会があり、ねぶた制作に対する熱意が感じられたことなどから制作を依頼することとなった。また、コロナによるねぶた師への影響を考え、現在は活躍できる場だけでなく、ねぶた作りの教室の場などを提供している。

【囃子について】

NTT グループねぶたの囃子は赤誠会が担当しており、現在結成 35 年目である。赤誠会には扇子持ちが多く在籍していることから、扇子持ちと囃子の会とも言われている。会の結成

の際は、正調囃子保存会の方々ではなくNTTグループの社員が中心となって結成した。会の名前には真心をもって活動してほしいという当時の会長の思いが込められている。演奏を綺麗に見せるために、太鼓・笛・鉦ともに鳴らしどころを意識している。

文責：小田麗華

JRねぶた実行プロジェクト

～厄除けの神に願いを込めて～

【2022年の見どころ】

今年の題材は「鍾馗」。正面で勇ましい表情を見せる鍾馗は、疫病を追い払う神だ。病に倒れた玄宗皇帝の夢の中で、悪鬼を退治する姿を表現している。2020年、2021年とねぶたのない夏を経験しながらも、団体としてできることを尽くしてきた。2021 年は本祭中止に伴う混乱もあったが、安全祈願を経て魂が籠った白ねぶたをこのまま終わらせるわけにはいかないと、最後まで制作を続けた。様々な制約の中で自分たちにできることを精一杯考えた経験は、若い社員が成長するきっかけにもなり、会社全体にとってプラスであった。

例年通りに盛り上がることができないとしても、内に秘めた思いを放ち、県内外のお客様に楽しんでもらえる安全な祭りを作り上げたい。制作者の竹浪比呂央氏は、青森ねぶた祭が中止となった2020年、新型コロナウイルス感染症退散の願いを込めて、100通りの鍾馗を描いたことで知られる。竹浪氏が生み出す立体の鍾馗様にもご注目あれ。

【歴史・運行】

昭和 39 年に「国鉄」として初陣、平成元年からは「JR ねぶた実行委員会」に名称を変更し平成 21年から現在の「JR ねぶた実行プロジェクト」に名称が変更された。囃子は「JRねぶた囃子会」が行う。メンバーは社員と一般の方で、会員数は150人で構成されている。青森駅西口の海側で6月4日より練習を開始している。跳人については、通常1日で約350人が参加しているが、今年は社員や関係者のみで110人ほどの参加を予定している。吹き流し方式に変わっても、3年ぶりのねぶた祭開催を青森市内外の皆様にお届けしたい。

【制作】

平成16年以降の制作は竹浪比呂央氏が担当している。以降は新青森駅開業や北海道新幹線開業など新幹線の推移や、“交通安全”・“速さ”にちなんだ題材が特徴だ。平成28年には、「蝦夷ヶ島と九郎義経」がねぶた大賞に輝いた。

文責：佐々木世奈

青森市役所ねぶた実行委員会

～満を持して！十二神将いざ出陣！～

【2022 年の見どころ】

今年の制作者は昨年に引き続き京野和鴻氏である。今回のねぶたの題名は、「興福寺仏頭と十二神将」だ。昨年、途中で出陣を断念したねぶたを今年に向けて二年がかりの長い時間をかけて制作された。クラウドファンディングでの合作ねぶたの制作以前から作ってみたかった題材ということだ。1 台のねぶたの中にどう十二神将が現れるのか、迫力あるねぶたが楽しみである。前ねぶたは関係課の事業 PR に加えて、関連する機関（航空会社等）が出陣し、ねぶた祭りを盛り上げる。

【運行団体の歴史】

青森市役所ねぶた実行委員会は 1958 年（昭和 33 年）に運行を開始し、今年で 62 回目の出陣となる。職員の福利厚生の一環としてだけでなく、地域のお祭りへの参加を通じて、ねぶたの伝統文化保存への寄与ということを目的としている。市役所の職員は公務としてではなく、任意団体である市役所職員の互助会の事業に参加という形でねぶた祭りに参加している。

【運行について】

市役所のねぶた運行に関わる事務は人事課が主に担当しており、曳き手は、職員の他にアルバイトを雇い補っている。運行の安全確保のための統制に関しては、職員の中から手伝っていただける方を募集している。囃子は市役所内に任意の組織があり、現在 50～60 人が登録している。4～5 月には囃子体験会を行っており、新規加入者の受け入れも行っている。メンバーは主に市役所職員であるが、家族で参加している人や、かつて市役所に勤務していた方、ALT の先生も参加している。

【制作について】

ねぶたの制作は昔から第 4 代名人の鹿内一生氏が立ち上げた「我生会」に依頼している。現在は、前述でもあるようにねぶた師の京野和鴻氏が手がけている。市役所ねぶたは、制作者が作成した原画をねぶた実行委員会の長である市長が確認し、題材を決定している。テーマや題材に指定はなく、制作者がつくりたいねぶたを制作してもらっている。かつては、本学の学友会においても市役所ねぶたの前ねぶたとして出陣していたとのことである。

【囃子の特徴】

一番に言える特徴は、「みんなが楽しんで演奏している」という点であり、大きくは地域

交流の場となっていることだ。特別にきっちり整列する形ではなく、自由度を高くすることで、国道に出たときでも沿道のお客様にも楽しんでもらえるよう、太鼓の台車から遠く離れた観客席の方に出向いて笛と手振鉦を演奏するという工夫をしている。演奏は青森ねぶた正調囃子保存会の囃子をベースにしており、昭和 35 年からこれまで連続してねぶた祭りに参加している。

【今年にかける思い】

三年ぶりとなる祭りを、進行方法や跳人の制限等変更はあるが、何事もなく最後まで盛り上げていきたいと意気込む。

文責：平田昂至

マルハニチロ佞武多会

～2 年分の想いを見よ！今年こそは目指せ入賞！～

【2022 年の見どころ】

今年の題材は「豪傑　武松　猛虎退治」。制作は手塚茂樹氏である。超人的な力で強敵に立ち向かう武松。その勇姿にコロナ禍の憂いを払い、日常が戻り、恒久的な平和が続くことを願う。マルハニチロ佞武多会は 2 年間、本祭にも代替イベントにも出陣することもできなかった。今年お披露目される「豪傑　武松　猛虎退治」は昨年代替イベントで披露されるはずだったものを引き継いでいる。制作していた骨組みは卸センターに倉庫を借りて保管していた。2 年間温めていた迫力満点の「豪傑　武松　猛虎退治」にぜひ注目していただきたい。

【歴史】

マルハニチロ佞武多会の歴史は古く、2016 年に 50 回目の出陣となった。これは戦後の昭和 28 年を第 1 回として数えているが、実際はもっと昔からある。当初は昭和 28 年「大洋漁業」。昭和 44 年「大洋漁業ねぶた会」、昭和 55 年「青森は佞武多会」、平成 6 年「青森マルハ佞武多会」。平成 20 年にマルハとニチロの 2 社が統合された経緯から「マルハニチロ佞武多会」に名称が変更され現在の形になった。

【運行】

跳人は 1 日に約 100 名。だが、今年は新型コロナウイルスの影響で、一般の方は受け入れない予定だ。囃子はマルハニチロ佞武多会囃子方海鳴が担当している。メンバーは約 150 名だ。進行の際「二丁ばち」、「二度ばち」、「流す」という 3 種類の太鼓の技とそれぞれの楽器

の拘りを持って、ねぶた本体や跳人の方々の魅力をより一層際立たせる団体だ。ねぶた期間以外でも様々なイベントに参加している団体で、年間通して 30 回程のイベント参加数を誇るのも海鳴の大きな特徴である。

【制作】

平成 26 年からは手塚茂樹氏が担当している。手塚氏はこの年に本団体で大型ねぶたの制作デビューをした。子供が見て「怖い」と思うような迫力のあるねぶたを制作したいと考えている。題材について、今年は今年で考えていたが、昨年度出陣できなかった悔しさもあり、昨年度の題材を持ち越した。題材についてスポンサー側からお願いしていることは特になく、ねぶた師さんにお任せしている。

文責　七海香穂

サンロード青森

～千葉作龍氏、最後の弟子！いざ！出陣！　～

【2022 年の見どころ】

今年の題材は、『水滸伝「張順破水門」』である。制作者は吉町勇樹氏。水滸伝に登場する、天損星・浪裏白跳張順は、敵軍杭州城の大水門「湧金門」を怪力で打ち破り味方を大勝利に導いた。『水滸伝「張順破水門」』は、疫病・災害・戦争と様々な苦境にあえぐ昨今、張順のごとく水門を打ち破り、平和な未来を切に願うものとして制作されている。

今年も入賞という目標や、地元と密着し、ねぶたの繁栄やねぶた祭りを通して地域貢献をするショッピングセンターとしてあり続けたいという想いは不変である。そのため、「ねぶた祭りを地元としてどうしていくか」を常に考え出陣している。また、LED の導入による色の出し方に工夫を凝らしているため、是非、注目頂きたい。

【運行団体の歴史】

サンロード青森は、地元の人々に開業を知ってもらおうという目的で出陣することを決めた団体である。開業準備に追われるなか、ショッピングセンターの呼称の周知も兼ね、ねぶた祭りに参加することが良いのではと地元の出店者からの話もあり、制作が進められた。今年で 42 回目の出陣となる。

【運行について】

曳き手は現在、高校生のアルバイトが主となっており、跳人はコンベンション協会の方針

に沿って決める。しかし、新型コロナウイルス感染症のワクチンや、登録した情報を 1 人ずつ確認するのは大変であるため、全部を把握できるような規模にしている。サンロード青森は特に親子連れの参加が多く、極力花笠を被ることをお願いしている。浴衣はサンロード専用のものもあり、その他に主たるスポンサーの富士通・郵便局各々の専用の浴衣などを着ている。囃子は「サンロード青森ねぶた囃子会」。以前は「青森正調ねぶた囃子保存会」にほとんどの団体が依頼していたが、自分たちで囃子をやろうと平成３年に結成している。サンロード青森の運行は、出店者の店長からなる店長会を中心にテナント及び主協賛先の方々に参加してもらうなどして人数を調節している。

【制作について】

1975 年の初年度は、出陣を決めたのが祭り間近であった為、千葉作龍氏から山内岩蔵氏を紹介頂き、その後石谷進氏、そして再び千葉作龍氏が制作をすることとなった。山内岩蔵氏は 1977 年の 1 年間、石谷進氏は 1978 年から 4 年間、千葉作龍氏は 1982 年から 2019 年まで制作をした。

千葉作龍氏は、2012 年に第五代ねぶた名人に選ばれ、その後 2016 年大型ねぶたを制作して 50 年目を迎えた。その千葉作龍氏の四番目の弟子である吉町勇樹氏が今年デビューする事となった。そのため自信のあるものを制作してもらうため、吉町勇樹氏の何を作りたいかという気持ちを尊重している。また、新しい気持ちで大型のものを制作してもらっている。

例年、制作者の方々とは題材について話し合いをする。これは、経済情勢や災害を克服し、平和を願うといったことを含め、年明けに具体的にどういう題材にするかを話し合う。
また、千葉作龍氏とは 2020 年（オリンピックが開催された時期）にサンロードの代表者である櫛引氏と 2 人で今後についての話し合いが行われており、その後中止が発表された。翌年の代替イベントでは千葉作龍氏は制作者ではなく関係者の立ち位置にいた。そして、千葉作龍氏は「2022 年はどう、けじめをつけようか」と考えた末、今年は最後の弟子に譲ることにした。

【囃子について】

練習場所は倉庫を壊してしまったので、荒川小学校の体育館や、ワラッセをかりて、週２で囃子の練習をしている。また、入会したものはみんな笛から指導し、メロディーを覚えた人から希望の楽器へ移行するため、全員が笛を吹くことができるというのが特徴である。また、サンロードといえば出発前の「集合・出陣太鼓」がある。これはサンロード青森囃子会のオリジナルである。スタート地点で「これから出発するぞ」という意味合いを込めて演奏され、大太鼓 7 台を使用しており、大きな見せ場となっている。そしてサンロード青森は、プロの演奏家である鳴海昭仁氏が指導者として携わっており、サンロード青森のねぶた囃子を盛り上げている。

文責：小田麗華

に組・日本風力開発グループ

【囃子について】

マイクやスピーカーなどの音響を一切使用しない生演奏にこだわっている。また、あえて整列しないことで観客に楽しさや躍動感を伝えられるようにしている。オリジナルの半纏に誇りを持っており、認められた者だけが個々に採寸して作り着用できる一点物で、不要な総書記品の装着を禁止するなどのこだわりがある。初の運行団体お抱えの囃子方で荒川地区の囃子を継承しており、この囃子を後世に保存、伝承することを目的としている。

【歴史】

戦後から出陣し 2019 年で 73 回目の出陣になる。消防団の中の一つの班で「に組」としてねぶたに参加している。当初は本町の地域ねぶた「消防団第三分団に組」として出陣しており、ねぶた師である北川啓三に制作を依頼していた。に組若者中心で活動しており、東芝が 40 年以上メインスポンサーについている。歴代のスポンサー企業は SANYO、サッポロなどで、5 年ほど前から au もスポンサーに加わった。その他の資金は地元の飲食店や町内企業と町内にお住いの皆様からの協賛金で成り立っている。運営の中心である「に組本隊」は「に組」組頭を筆頭に約 10 名で構成されており、ねぶた運行全体を仕切る役割担っている。他に 20 年の歴史を持つ「に組般若会（はんにゃかい）」と「に組に援会（にえんかい）」があり「に組」の協力会としてねぶた祭本番の際、運行統制を行っている。一昔前、カラス跳人の全盛期には必ず「に組」のねぶたが最後尾で、カラス跳人を制圧していた。

【囃子】

「青森ねぶた囃子保存会　に組（に組はやし方）」は約 300 名所属しており、一年を通して囃子練習をしている。「に組はやし方」は白半纏が特徴的であり、それに憧れる人も多い。白半纏を着るためには、練習にきちんと参加しているかが重要で、1 年間練習をしっかりやっているのが認められれば 2 年目の本番で白半纏を着ることができる。跳人の衣装や浴衣の貸し出し・レンタルはしていない。花笠だけは貸し出しをしていて、100～200 個を用意している。現在も跳人から人気が有り 1000～2000 人の地元の若者が参加している。リヤカーを引くのはアルバイトであるが、ねぶた本体の曳手は「に組」のことが好きなボランティアの若者が集まっている。祭りを純粋に楽しむことが一番で、賞は後からついてくるものだと考えている。北村隆氏に依頼してから 2019 年で 11 年目。毎年テーマ設定はしないが、2016 年は 70 周年の記念として消防団の纏（まとい）を取り入れてもらった。

【活動】

に組は内外の活動が広く、2016 年に青森県で行われた六魂祭に参加。震災復興のための

ねぶた出張にも積極的で阪神淡路や東日本の震災の時にも復興祈願でねぶたを出陣させた。最近では熊本へも出張しており今年も遠征を予定している。2015 年には、イタリアのミラノ万博にねぶたを出した北村隆氏に協力して、一緒に参加を果たした。音響設備を必要としないため、行動が早いのが特徴だという。

文責：佐々木てる

青森山田学園ねぶた実行委員会

～皆と協力し合い、最高の夏を！～

【2022 年の見どころ】

2022 年の青森山田学園の題材は「三内丸山　縄文の祈り」である。正面には縄文人と野生動物、そして光を放つ板状土偶。送りに散りばめられるのは、三内丸山遺跡の大型掘立柱建物や八戸の合掌土偶、猪形土製品など、青森の縄文文化を代表する建物や出土品だ。2021 年 7 月、世界文化遺産に登録された北海道・北東北の縄文遺跡群を祝う気持ちが込められる。

新型コロナウイルス感染症の影響で本祭が中止となった 2020 年、そして、一般の人に大型ねぶたを公開出来ぬまま過ぎ去った 2021 年。2022 年は、みんなが参加できる 3 年ぶりの青森ねぶた祭だ。出陣したねぶたは、必ず審査される。順位もつく。しかし、自分たちだけが盛り上がるのではなく、皆と協力し合って安全に運行するのが一番である。ねぶたが好きな県民や観光客が楽しめる夜を作り上げ、祭全体の評価をあげたい。3 年ぶりの青森ねぶた祭で、青森山田学園のねぶたと共に縄文時代へタイムスリップしよう。

【運行団体について】

1971 年、青森大学開学 3 年目に初の出陣を飾る。当時最大の後援者であった青森県信用組合が、理事長・木村正枝氏に働きかけたのがきっかけである。まだ経営学部のみで、学生数も 120～130 人。ねぶた責任者であった斎藤守太教授を先頭に、大学全体で参加した。当時は、現在のように青森山田学園ではなく青森大学として運行。また、先頭の役員団の前に青森山田高校のブラスバンドが演奏しており、「学生らしいねぶた運行」が行われていた。

その後 1989 年（平成元年）より毎年出陣しており、最初に賞（田村麿賞）をとったのが 1994 年の『宇治川の先陣争い』。制作者は北村隆氏である。この年は跳人賞も獲得しダブル受賞であった。制作者の北村隆氏は平成 2 年から現在に至るまで青森山田学園のねぶた制作を受け持っている。その間、田村麿賞、ねぶた大賞受賞歴は 6 回。特に平成 18、19、20 年と 3 年連続でねぶた大賞を受賞し、青森山田学園のねぶたの全盛期を作った。北村氏の第

6 代ねぶた名人への道のりは山田のねぶたにあるといっても過言ではないだろう。

青森山田学園として出陣するようになったのは 2003 年（平成 15 年）から。そこから「学園ねぶた」の愛称で出陣し続けている。OB、そして学園関係者の力が、「学園ねぶた」の源だ。

【運行について】

なんといっても学生生徒中心の元気ある跳人が魅力。曳き手は主に部活（野球部・剣道部）の学生である。そこに教職員・ＯＢが加わって運行される。囃子はＯＢ中心の「隆櫻會」。會の名称は、受賞全盛期に理事長であった故「北村隆文」氏と現制作者「北村隆」氏の「隆」、学園のトレードマークの「桜」からとっている。青森市の教育機関としては唯一単独で大型ねぶたを運行しており、青森山田学園から輩出される全国的にも有名なスポーツ選手の活躍が、毎年運行に花をそえている。

文責：佐々木世奈

青森県板金工業組合

～ひと際目立つ美人ねぶた！LED でより美しく！～

【2022 年の見どころ】

運行開始から 55 年目を迎える青森県板金工業組合の今年のねぶたの題材は「毘沙門天と吉祥天」。制作は北村春一氏が手掛ける。この作品は、龍と共に現れ蓮池で舞う「吉祥天」と悪を退け護国の神とも言われ、妻を守る勇ましい姿の「毘沙門天」が描かれている。これらの伝説の内容、人物や意味合い、受け継がれていく人々の思いや願いが込められている。ねぶたはすべて LED 電球を使っており、使う場所の色加減を考えて制作している。是非、そちらにも注目して欲しい。

【運行について】

注目すべきは、全国から集まるバイクライダーやチャリダーの跳人である。ねぶたの時期になるとフェリー埠頭近くのキャンプ場にテントを張って宿泊し、連日参加。バイクライダーやチャリダーにとって、キャンプ場はリーダーやサブリーダーを決める場でもあり、ミーティングをする場でもあるため、とても重要な場所となっている。また、150 人ほどが集まり、毎日交代で 10 人前後、運行に協力してもらう。バイクライダーやチャリダーの皆さんと息の合った運行は、板金工業組合の見どころの一つである。しかし今年は、新型コロナウイルス感染症の影響により、来年に見届ける可能性がある。

また、曳き手は青年部が担当している。定年は45歳と、元々の40歳から５年延長している。それでも少子高齢化で人数が足りなく、将来的には50歳に引き上げる可能性やアルバイトを雇う可能性もある。

【囃子について】

一心會は、初代会長の上野山さんが「みんなが一つになり、囃子の演奏をする。ひとつの心になり仲良くやる」という意味を込めて命名した。現在は150人ほどおり、毎年本番2ヶ月位前には、練習場所を移動。みちのく北方漁船博物館駐車場の一角で行っている。また、古川の地域ねぶたに15年程度関わっており、一心會と地域の関係はとても深くなっている。一心會が設立されてからは、運行団体として一体感が生まれた。正調囃子をベースとして演奏してきたが、最近ではオリジナル部分を取り入れ始め、自分たちが納得できる演奏に近づけている。また、イベントにはその都度参加している。前回は東京ドームや国立都市で開かれているイベント、明治神宮の祭り、きずな祭りにも参加した事がある。また、毎年反省会を開き、より良いねぶたになるように努力し続けている。

【制作について】

ねぶたのテーマは、原画を2、3点持ってきてもらい、その中から理事長・組合役員が主体となって選び決定することが多い。制作は、過去は千葉作龍氏、内山龍星氏、北村蓮明氏が手がけた。2020 年から息子の春一氏にバトンタッチの予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で、本年から春一氏が制作することとなった。北村蓮明氏と春一氏は親子ではあるものの、作るねぶたも描く絵も違い、どちらも華やかであるが、北村春一氏の描く女性やねぶたの女性もとても綺麗であるため、ぜひ注目して欲しい。

文責：小田麗華

ねぶた愛好会

～諏訪慎の真骨頂！おどろおどろしいねぶた～

【運行団体について】

ねぶた愛好会は、ねぶたを好きな人たちが集まって立ち上げられた団体である。ねぶたの制作は25回にわたり石谷進氏に依頼していた。現在の制作者は諏訪慎氏である。発足当初から今まで、資金の調達スタイルは変わっていない。大きい団体のスポンサーはなく、諏訪先生が描く今年のねぶたがデザインされた手ぬぐい、Tシャツ、市内業者からの提灯等を販売し、資金を調達している。この２年の間で断られた企業もあるが、新規で協力してくれる

企業もあり、その年その年をつないで資金を集めている。40 年間一切スポンサーをつけずに運行してきた唯一の団体であり、皆さんがスポンサーとなって毎年出陣している。

曳き手はボランティア 12〜13 人と高校生のアルバイトを雇い、跳人は完全に自由参加だという。衣装は、各自が着て集まり、基本的に皆自分で衣装を着ることができる。

【2022 年のねぶたについて】

今年の題材は、「大物浦の亡霊」（だいもつうらのぼうれい）。江戸時代の浮世絵師、歌川国芳（うたがわくによし）の武者絵を見て決めたそうだ。今年は生首、がしゃどくろのねぶた作りたいという思いから決定した。今年もおどろおどろしいねぶたがみることができそうで楽しみである。前ねぶたの金魚ねぶたの候補は「大谷翔平選手」で、その年の話題になったものをテーマにしており、いつも直前に決めているとのことである。

【制作について】

ねぶたの題材は 4 月の総会で正式に決定。5 月の柱建ての際は会員の方に召集をかけ、みんなで安全を祈願する。7 月の台上げの際も、最低 50 人は必要になるので召集をかける。ねぶた制作の人集めは、会員の方に「紙貼りなどの手伝いにきてください」といったような、案内を出している。またねぶた愛好会では、個人名の入った提灯をねぶたに飾ることができる。出資した方限定ではあるが、自分の名前の入った提灯があればよりねぶた祭を楽しめるのではないだろうか。

【囃子について】

ねぶた愛好会囃子委員会の会員は 200 人ほどいる。本番には 100 人以上の方が参加。練習は土曜日の 6 時から岸壁で行っている。ねぶた愛好会は自主団体として設立されたため、囃子もねぶたの制作もすべて自分たちでやるというのが特徴である。また笛の講習会を開き、これまでに 5,000 人以上に教えてきた。太鼓のたたき方はプロの演奏家指導の元、シンプルなものに変更した。

【諏訪氏の活動】

ねぶた祭りが開催されなかった期間にもクラウドファンディングによる十二神将合作ねぶた、青森や東京、神奈川の店から依頼されて面の制作など、ねぶたを作り続けてきた。依頼されたものには、神奈川県の寒川神社からの依頼で、箙（えびら）の梅がある。合浦小学校にある子供用の小さいねぶたの制作や、学校行事がなかった小学 6 年生に諏訪氏の兄弟子がつくったねぶたのリメイクをして、諏訪氏指導の下、紙張り、ロウ入れ、色塗りをしてもらうイベントも行った。

【今年にかける思い】

3 年ぶりの祭り、来年、再来年も出られるように繋げるための祭にしたい。今年ねぶた祭りを開催してやっぱり駄目だったとならないよう、そのために感染対策に気を付けて、次に向けて繋ぐことができるようしっかりやりたい。

文責：平田昂至

公益社団法人　青森青年会議所

～笑顔溢れる青森　さっぱり！最高！感無量！～

【2022 年の見どころ】

今年の題材は立田龍宝氏の「風神雷神」である。この題材には、新型コロナウイルス感染症により 2 年連続で中止となったねぶた祭を今年こそ開催し、その開催を祝福するという意味が込められている。風神の風袋から龍が太鼓・笛を運び込み、雷神が太鼓を叩きながら市民を集める様子がイメージされる。

青森青年会議所では、ねぶた本来の姿を取り戻そうと、町会での運行にも力を注いでいる。ねぶた祭が中止となった期間も、青年会議所メンバー有志が新たな運行団体を立ち上げ、町会から青森全体を元気にしようと取り組んだ。今年の目標を「さっぱり最高感無量」とし、今年こそはねぶた祭を開催したいという強い意志、ねぶた祭を愛する気持ち、協力してくれる仲間に対する感謝と共に 100％の力で準備が進められている。

【運行団体の歴史】

青森青年会議所は、創立 15 周年の記念事業として昭和 41 年に運行を開始した。今年で 53 回目の出陣となる。青森青年会議所はまちづくり団体であり、主に地域に対しての運動ということに力を入れて活動している。そのため、青少年の健全な育成を目的として祭りに参加している。青森青年会議所の活動の中で、ねぶた出陣事業は地域に対してまちづくり、人づくりの一番有効なルーツであると考えられており、地域活動の一部となっている。ねぶた祭において、賞を取ることよりも、青森を愛し、市民として誇りを持つ人財を増やしていくことが明るく豊かな社会の実現に向け、大切な部分であると考えている。

【運行について】

青森青年会議所では、過去に跳人として多くの人に参加してもらい、跳人やねぶた祭の楽しさを知ってもらうため、「跳トモプロジェクト」というものが行われた。また、各家庭にあるが使用されていない衣装をリユースする「衣装再生プロジェクト」も行われた。

今年は、跳人が事前登録制となり、跳トモプロジェクトは実施せず、抽選に当選した一般

参加者と関係者での跳人運行となる。囃子は 70～80 名ほどが予定されており、全体的に例年よりもコンパクトになることが想定されている。

【制作について】

運行開始年である 1966 年は北村隆氏に制作を依頼。翌年は運行せず、1968 年から 2 年間は石谷進氏が制作した。1971 年には佐藤伝蔵氏が制作をし、帯広の平和祭りにも参加した。そして、2013 年から現在まで立田龍宝氏が制作を担当。青森青年会議所では、後継者育成事業として若手ねぶた師の育成にも力を入れており、本年は「むつ小川原財団」の協力のもと、ねぶた師立田龍宝氏の弟子・細川知敬さんによる地域運行ねぶたの初制作も実施している。

【JC はやし隊】

JC はやし隊は、「明るく、楽しく、元気よく」を理念とし、賞を取ることよりも、青森ねぶた祭で演奏できることの嬉しさや楽しさを表現することを目指している。観覧客からも「JC は楽しそうに演奏している」と評価されるほど楽しそうにパフォーマンスすることが特徴である。青森青年会議所を盛り上げつつ、観覧客の心を掴む囃子団体が JC はやし隊である。

文責：川口華流

日立連合ねぶた委員会

～14 年連続入賞の記録を超える！新たな歴史の始まり～

【2022 年の見どころ】

今年の題材は北村蓮明氏の「一ノ谷の戦い　熊谷次郎直実」である。平安末期から活躍した武将、熊谷次郎直実は、武蔵国大里郡熊谷郷(現・熊谷市)の領主であった。常に先陣をきってかけていく姿は「当代随一の武将」と評されていたが、一ノ谷の戦いである若武者を討ち取ったことで人生が変わる。その若武者は、平氏の大将平経盛の息子敦盛であった。息子ほどの若武者を斬らなければならない切なさ、後悔の念を抱くことになる。ねぶたでは、直実が日の丸扇をかざし、若武者に声をかけ引き返すように促している場面が表現されている。2 人の運命を暗示するように鳥の群れが一斉に飛び立っている。

昨年は「疫病祓い『スサノオ神話』」で銅賞（3 位）として表彰されており、今年もまた力のこもったねぶた制作となっている点に注目である。

【団体の歴史】

日立連合ねぶた委員会は 2015 年に 50 周賞を受賞した歴史ある団体である。受賞歴が特に多く、2017 年には 14 年連続での海上運行という偉業を成し遂げた。また、日立の囃子方である「凱立会」も囃子賞を過去に 13 回受賞している。新型コロナウイルス感染症の流行にも負けず、「凱立会」は Web などで様々な活動を行ってきた。こうした 3 年間の取り組みでさらに結束をかためた「凱立会」の演奏に注目したい。

【ねぶた制作】

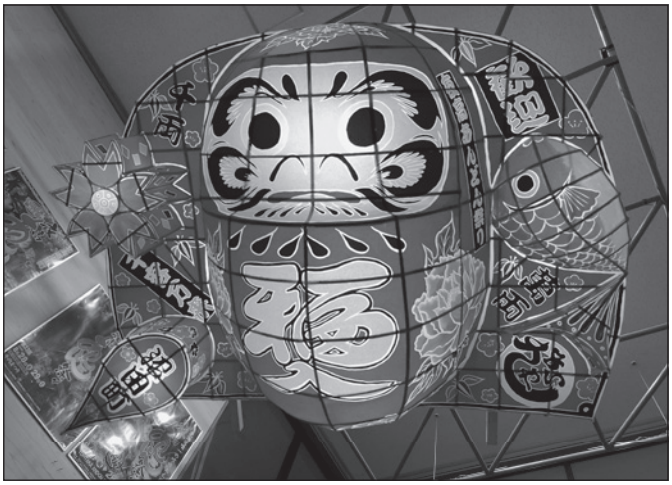
日立のねぶたを最初に制作したのは第 3 代ねぶた名人佐藤伝蔵氏である。そして、2004 年から北村蓮明氏が制作している。ねぶた制作に関しては、ねぶた師に全てお任せしており、ねぶたの題材などもねぶた師が決めている。2013 年には、LED を導入したねぶたで初めて大賞を受賞している。

【凱立会】

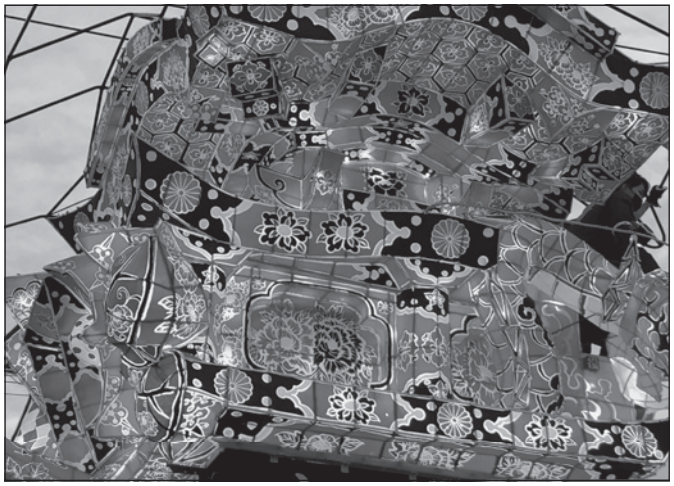
凱立会は、初代青森ねぶた正調囃子保存会会長である南了益氏が大切にしてきた「囃子、技法、歴史、心」を受け継ぎ、全てを伝えていく趣旨で結成された会である。賞に関係なく、普段から勉強や練習をし、最高の囃子を祭りで届けること、正調囃子をはじめとした囃子に携わった先人たちの思いを受け継ぐことを理念としている。特に注目すべきは太鼓である。本来 53 節あった囃子をどう 7 節に落とし込むか、熱心に研究し、強弱だけでなく演奏している姿から囃子にかける熱い思いが伝わるだろう。

文責：川口華流

1



2



3

4

5

6

7

於　青森公立大学公開講座 2022
竹浪比呂央「造形芸術としてのねぶた」

北海道調査とその後
― 岩見沢ねぶた祭を中心に ―

竹浪比呂央ねぶた研究所
弘前大学医学部医学科
弘前大学大学院医学研究科小児科学講座
津 川　創
Hajime TSUGAWA

8

於　青森公立大学公開講座 2022
竹浪比呂央「造形芸術としてのねぶた」

北海道調査とその後
― 岩見沢ねぶた祭を中心に ―

研究生（≒弟子）として
竹浪先生ご指導のもと
大型・中型・小型ねぶたの制作
およびねぶた研究（美術・芸術学、歴史学、民俗学、社会学、教育学、etc.）

竹浪比呂央ねぶた研究所
弘前大学医学部医学科
弘前大学大学院医学研究科小児科学講座
津 川　創
Hajime TSUGAWA

9

於　青森公立大学公開講座 2022
竹浪比呂央「造形芸術としてのねぶた」

北海道調査とその後
― 岩見沢ねぶた祭を中心に ―

学部5年次学生,
Student Doctor（SD.）として
診療参加型臨床実習を

竹浪比呂央ねぶた研究所
弘前大学医学部医学科
弘前大学大学院医学研究科小児科学講座
津 川　創
Hajime TSUGAWA

10

於　青森公立大学公開講座 2022
竹浪比呂央「造形芸術としてのねぶた」

北海道調査とその後
― 岩見沢ねぶた祭を中心に ―

小児の血液疾患・腫瘍の研究
（主に ML-DS の *GATA1* mutationに関する実験など）

竹浪比呂央ねぶた研究所
弘前大学医学部医学科
弘前大学大学院医学研究科小児科学講座
津 川　創
Hajime TSUGAWA

11

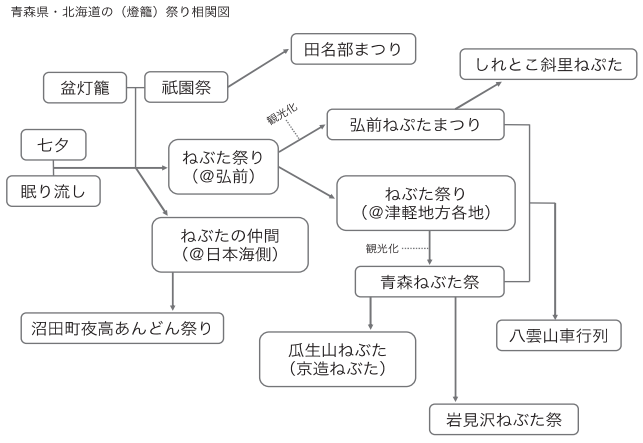
北海道調査

青森公立大学 …　佐々木てる先生、学生の方々
研究所 …　竹浪先生、津川

沼田町夜高あんどん祭り
- 8月19日～20日
- 祭りの見学
- 関係者への聞き取り

岩見沢ねぶた祭
- 8月21日～22日
- 祭りの準備の様子を見学

12



13

北海道にも多様な燈籠文化

14

沼田町夜高あんどん祭り

祭り（主に青森のねぶたとの比較）

- あんどんの「ぶつけあい」の時の盛り上がり
- 「町のイベント」ような印象
- 参加者と観客との温度差
- ハレとケ…

造形

- 富山県の夜高あんどんを模倣（形態・色彩・素材）
- 伝統を重視
- 青森ねぶたなどから輸入したものと思われる表現も

15

おまけ

16

おまけ

17

岩見沢ねぶた祭

18

岩見沢ねぶた祭

- 1993年、岩見沢あやめまつり（現・彩花まつり）にJRねぶたと北海道教育大学岩見沢校の荒馬との共演がはじまる。
- 2000年、JRねぶたの制作が途絶える。
- 2018年、岩見沢ねぶたプロジェクト発足。

19

先日の勉強会で…

20

先日の勉強会で…

21

阿南透先生から頂戴したコメントより

- ねぶたは、ある程度までは誰でも作ることができるものなので、全国あちこちで行われています。
- 実は瀬戸内芸術祭でも、2010年と13年に、京都造形芸術大学の椿昇先生が、高松で「うみあかりプロジェクト」という、ねぶた風のオブジェ制作をしました。地元の小中学生が一緒に制作してやりました。その時に指導した先生が技術を身につけて、その後も「ねぶた風の作品」を香川県立博物館に展示したことがあります。「うみあかりプロジェクト」は２回だけで終わってしまったようですが、高松でも、ねぶた風の作品を作れる人はいるので、何かあれば祭りになるかもしれません。
- 岩見沢は、人口７万台の町としては、大学があるのが強みだと思います。特に教員養成大学ですので、岩見沢でねぶたを経験した人達が、教員として各地に赴任し、各地で岩見沢ねぶたをPRできる余地はあると思います。

22

先週…

岩見沢ねぶたプロジェクト実行委員会　ねぶた制作者育成事業

第1回　ねぶたを学ぶ会

2022年11月27日（日）
17:30～19:00

23

「ねぶたを学ぶ会」

求める講師像：

- ねぶた（芸術学・民俗学・歴史学・社会学領域を含む）に関する教育および研究に熱意を有する者。
- ねぶた制作の経験を十分に有し、当該領域における美術的側面の研究および実技教育を実践できる者。

対象：北海道教育大学 岩見沢校 学部学生 ほか［希望者］

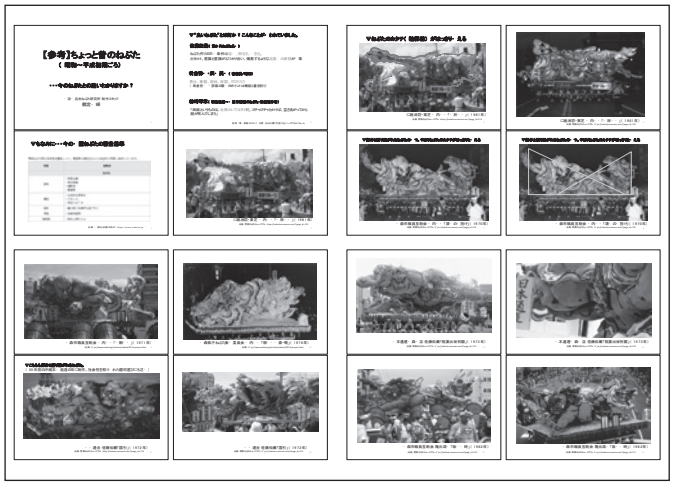
内容：

- ねぶた文化概論（民俗学、歴史学）
- ねぶた制作技法概論

24

25

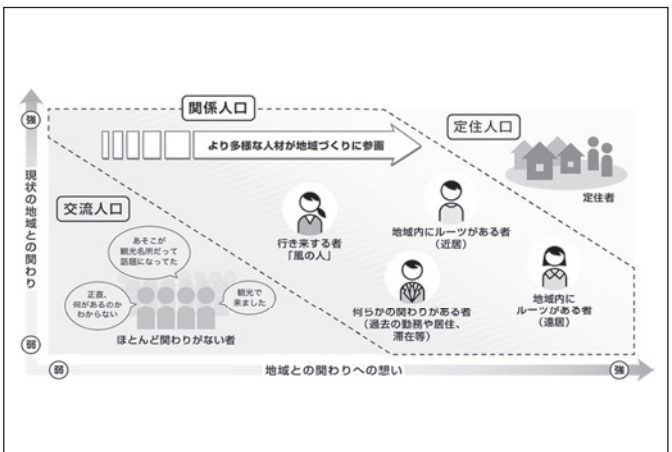
26



27

28

29



図版引用：総務省HP> 関係人口ポータルサイト> 関係人口とは（https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html）

30

「あたらしい」ねぶた文化形成のために

- 観客が期待する and/or 美術的水準の高い造形の制作。
- 教育機関（大学・高校）が、教育に取り入れることも有効。
- 地域の文化や歴史に基づいた多様性。
  祭りは、日常と街に根づいたアート。
  その地域の文化や人々の営みをふまえた、
  その場所でないとできない祭り／作品づくり。
- 完成したものは、それ以上の変化や発展の余地は望めない。
  「完成した祭り」を持ち込んだ際、それを根付かせることの難しさ。
  不完全であることは、完成に向かって無限の可能性が開かれている。

31

大きく考えながら、一つひとつを丁寧に。

- 「知は、現場にある」
  （光文社新書のキャッチコピー）
- どこまでも「現場」の人間として
- 美術的水準の高いねぶた制作。
  表現と技法を究めていく。

▲竹浪先生のねぶたの吹き付けを行う津川
（撮影：浅利 翼）

- 学術面では…
  芸術学、民俗学、歴史学、社会学、教育学、…
  をも含む総合科学としての「ねぶた学」

cf. 「医学は自然科学の一分野にとどまらず、人文・社会科学をも含めた総合科学」

- 先人たちが築き上げてきたねぶた文化。
  畏敬の念と謙虚さとをもち、第一人者ならぬ「第x人者（x→∞）」の姿勢で自己研鑽を。

32

2022年度　地域連携センタープロジェクト事業
成果報告書
造形芸術としての「ねぶた」
～富山県･北海道の行燈／京都瓜生山ねぶたとの比較から～
発行日　　2023年３月
発行所　　青森公立大学　経営経済学部
　　地域みらい学科　佐々木研究室
　　〒030-0196 青森市大字合子沢字山崎153-4
　　ＴＥＬ　017-764-1570
印　刷　　アクセス二十一出版有限会社